

蓮實重彦 / nanakikae / 福永信
+ eri / 大杉重男 / 上野昂志 / 中
森明夫 / 谷崎由依 / 山本動物 / 生
田武志 / 海猫沢めろん / 藤野可織
→イヴァシュキエヴィッチ / 池田
雄一 / 内澤旬子 / 南陀綾繁 / 斎
藤美奈子 / 四方田犬彦 / 大久秀憲
/ 坂本弘道 / 川上未映子

¥0

追悼

A
R
/ G

タキシードの男
蓮實重彦

あたかもそれが自分にとつての悦ばしき権利だといふかの
ように、アラン・ロブクリエは、その生涯の終わりに、
一篇の「笑劇」を自作自演してみせる。自作自演とはいへ、
多くの人々が思いもかけぬ登場人物としてその上演に巻き
込まれるほかはなかったのだが、それは、「不死の人」とし
ての特権など何ひとつ行使せずに「死者」となるといっ
いかにも「不滅の女」（「不死の女」と同語である）の作者
にふさわしい「笑劇」にはかならない。

「不死の人」とは、アカデミー・フランスの四〇人の
終身会員を比喩的に指示する伝統的な呼称なのだが、彼は、
「不死の人」として自分を受け入れるべく口にする歡迎の
辞に耳を傾けることも、死によつて「不死の人」であるこ
とをやめた前任者モーリス・ランズ氏への賛辞を捧げるこ
ともしなかった。あたかも、そんな時代錯誤の儀式につき
あっている暇はないといふかのよう、就任式への出席を
回避しつつつづけていたのであり、その結果、彼は、アカデ
ミー・フランスの会員であり、同時にその会員ではない
というフィクションじみた曖昧な自己同一性を手にするこ
とになる。

アカデミー会員になろうとしながらもはたせず、榮譽あ
る「不死の人」としての権利すら行使しえずに「死者」と
なる人のほうが遥かに多いのだから、この曖昧さはあくま
で特権的な振る舞いであり、児童めいているといえはいか
にも児童めいているが、こんなにこのいささか退屈な人類社
会では、あえて児童を演じてみせる者さへほとんど見あた
らないのだから、この特権的な「笑劇」は演じられる価値
があったといえる。

ロブクリエがその大柄なからだを滑りこませるはずだ
った「肘掛け椅子」は、アカデミー創設時には文法学者の
ブオーシユフ（1585-1650）によつて占められていたもの
で、美術評論家フランスーときおり、レイムスという表記
もあるが、おそらくフランスと読むのが正しいだろう。前
任は社会学者のレーモン・アロンであり、彼はそれなりの
由緒ある系譜につらなるべき人だったといえる。だが、
二〇〇四年三月に会員として選出されてから二〇〇八年二
月一八日にノルマンディーの大病院で他界するまでのほ
ぼ四年間に、ロブクリエは、パリのコンテ・河岸にそび
えるフランス学士院の丸屋根の建物に、一度として足を踏
み入れようとはしなかった。就任の儀式など断固拒否する
とでもいってしまえばそれは簡単だろうに、彼は言を左右

にして出るやも出ないとも断言せず、いつか、そのときが来たらやるとささもらしていたかにみえる。これが「笑劇」のいかにもロブ・クリエのシナリオである。

理由がいかなるものであるにせよ、本来なら選ばれたこの名譽を口にしてしかるべき新会員が、ひたすら暖昧な言辭を弄して就任式を遅延させることなどアカデミーの歴史に前例はなく、四〇人の終身会員たち——現在には欠員があり三十三人しかいないようだが——は、前代未聞の事態にすっかり途方に暮れ、間接的な「督促状」（このものも妙だが）のようなものをロブ・クリエ宛に送ろうとしたことも一度や二度ではないらしい。就任式で身にとまることが義務づけられている金七ールで縁どられた緑色の制服はいうにおよはず、装身具としての伝統的な剣さすけすにいてかまわない。そうと希望されるのであれば、ごく普通のタキシード姿で来て下さればそれで充分だといった「妥協案」が提示されていた気配さえ感じられる。追いつめられていたのは、まさきもなぐ権威あるアカデミー・フロンセーズの方だったというわけではない。

そうした「督促状」や「妥協案」をしたためのアカデミー側の責任者が、たまたま、文学とはいささか無縁の「旧」ソ連問題の権威「エレヌ・カレル・ダンコー」ス女史だといふあたりはいかに「笑劇」じみていて、ロブ・クリエの死の知らせを「深い悲しみ」をもって聞いたというフランス共和国大統領ニコラ・サルコジ氏や「高名な作家でありアカデミー会員でもある」同氏に深い哀悼の言葉を捧げるというフロンソワ・フィヨン首相の言葉など、いかにも「笑劇」にふさわしい宙に迷ったモノローグとして黒い笑いを誘う。ごく「まとも」なこれらの成人男女は、あからさまに反社会的なベドフィリ——まがいの題材をあつかったボルノクラフィ——にはかならぬロブ・クリエの最新作『ある感傷的な小説』に目を通したうえで、それがアカデミー・フロンセーズの会員にふさわしい著作だと本気で信じているのだろうか。

フランスの新聞雑誌の追悼記事のどれもが言及しているこうした「笑劇」がどのような大団円を迎えるのかはまったく予測がつかないが、それについて語ることでこの主要な話題ではない。あれこれの記事に目を通していたわたくしの心を奇妙なやり方で揺るがしたのは、そこにまぎれこんでいた「タキシード」の一語である。実際、すでに触れたように、こと次第によつては、それを身につけてみずからの就任式にのぞむことになるのかも知れないロブ・クリエの「タキシード」姿を思い

描いたとき、その死亡記事を読んでもいっつこに現実感のわかなかった彼の不在が、初めて胸にこたえた。わたくしは、カトリーヌ・ロブ・クリエとともに、「タキシード」をまとったアランの姿を目にした世界で最初の一人だからである。

ここからはいささかフィクションめいた記述として、いきなり五十年ほど前の過去の一時期にまで遡ることにするのだが、「手前の方にいるのは男三人女一人のグループで、立ったまま、お上品な口調で活発に話に興じている。タキシード。……」（『去年マリエンバートで』）と書いたことはあっても、自分自身はまだ「タキシード」を持っていなかったアラン・ロブ・クリエは、一九六一年の夏の東京で、一着の「タキシード」をオーダーメイドで作らせることになる。二十五歳になったばかりのわたくしは、六本木の小さな中国系のティラーでその寸法取りに立ち会ったし、たしか一週間ほどで完成したはずのその黒い衣装を、帝国ホテルのロブ・クリエ夫妻の部屋で、彼が試着したのちに、みずから着てみたことさえある人間なのだ。

それが現実のできごとだとはにわかに信じられない二十一世紀の人々に向かって、これは正しい証言だから信じてほしいなどというつもりはない。ただ、当時はまだ三十九歳だったアランにとって、それは初めてあつらえた礼服であり、どんな着映えがするものかを客観的に見てみたかったようで、おまえも着てみよはどうかとうながしたのだと思う。ほぼ同じ背丈のわたくしがそれをまとうと、夫人のカトリーヌが、よく似合うからこの人にあげちゃいなさいよと笑っていたような気がするが、これは記憶違いである可能性もきわめて高い。

二〇〇四年に刊行されたカトリーヌ自身の『若い花嫁——日記 1951-1962』の記述をかりに信頼するとするなら、われわれがティラーを訪れたのは一九六一年八月一日火曜日の午後のごとで、最初の仮縫いが四日金曜日の、京都へと向かう特急——また、新幹線などというものは存在していなかった——に乗る直前の帝国ホテルであるから、その仕立ての早さはやはり尋常でない。ところが、三日ほどの京都旅行の後、完成した「タキシード」がいつホテルに届けられたのかをめぐる詳しい記述はないし、わたくしがそれをまとったのも書かれていない。にもかかわらず、わたくしはそれを着てみたのだといいはってみたところで、もちろんそこには何ほどの意味もない。

では、ロブ・クリエは、なぜ、わざわざ暑い夏の東京で、「タキシード」を注文したりしたのか。東京からの

帰途、まだジェット機など存在していなかったエールフランスのプロペラ機の南回り便で、香港——ここで、『快楽の館』の構想が生まれる——、バンコク、ニューデリー、テハランを経て数日後にローマにたどりつき、そこから列車で国際映画祭が開催中のヴェネチアに立ち寄り、彼がシナリオ——やがて「シネ・ロマン」として刊行される——を書いたアラン・レネ監督の『去年マリエンバートで』の上映に立ち会うためである。

カトリーヌの『日記』によると、公式上映は八月二九日火曜日の夕刻である。ローマからは駐伊フランス大使が、パリからはアンドレ・マルロー文化大臣の映画担当部長がかけつけたほどだから、この時期の国際映画祭はまだまだ儀式的に大げさなものであったようだ。一九六一年といえは、毎年のように溝口健二の作品が出品され、西欧の映画人たちが驚かせてから、また十年もたっていないが、その時期のことである。いまでは、「名作（一）」と呼ばれたりもする『マリエンバート』がその年の金獅子賞に輝いたことなどごく当然のように思われるかも知れないが、カトリーヌの『日記』を信ずるなら、貴賓席に位置する関係者たちは、上映中の観客の反応が気になって仕方がなく、まともにスクリーンを見ていらなかったらしい。終映とともにわき上がる拍手に、誰もがほっと胸をなでおろしたのだという。

だが、考えてみると、ヴェネチアのリド島での『去年マリエンバートで』の上映はいかにも奇妙なものに思える。その光景は、あたかも『去年ヴェネチアで』と題された「シネ・ロマン」に描写されていたとしてもおかしくないほど、「騙し絵」的なものだからである。実際、客席の男たちはことごとく「タキシード」を身につけているし、瀟洒な衣装の女性のかたわらで彼らが見ているスクリーンに登場する男たちもまた、瀟洒な衣装の女性たちのかたわらで、ことごとく「タキシード」を着ている。その年の映画祭の記録写真をいくつか見てみると、間違ひなく東京製の「タキシード」を着込んだアランもまた、いつになく生真面目な表情でレネのかたわらに立っていたりするのだから、彼自身もまた、どこかしら『去年マリエンバートで』（あるいは『去年ヴェネチアで』）の作中人物のように思うべきである。

すでに一部では注目されていたレネの名を国際的に高からしめたといえまらず、脚本家アラン・ロブ・クリエの名を小説以外の場で決定したといつてよいこの金獅子賞の受賞は、六本木のちっぽけな中国系のティラーを訪れて「タキシード」を注文したときからゆるやかに準備

されていたことになる。だが、そのときのわたくしが両アランの受賞を確信していたかといえは、これはきわめて疑わしいといわざるをえない。レネの『ピロシマ、モナムール』（『二十四時間の情事』）は封切り時に見ていたし、ロブ・クリエの『嫉妬』も翻訳が出てすぐに読んでいたが、この二つの名前が、国際映画祭での派手な受賞というイメージとはおよそ結びつかなかったからである。

ただ、東京製の「タキシード」が、アランに幸運をもたらしたというところだけは、否定しがたい事実である。その後、アランの体型には年齢によるさほどの変化もみられなかったから、かりに、アカデミー・フロンセーズの就任式に着てゆくのが同じ東京製の「タキシード」だったとしたら、彼の自作自演の「笑劇」は、「不死の人」たちのあすかり知らぬところで、五十年ぶりの「ハッピーエンド」を迎えていたのかも知れない。そして、そのことを証言できる人間は、いまもカトリーヌとわたくししかこの世に存在していない。

「シネ・ロマン」としての『去年マリエンバートで』が刊行される以前のアラン・ロブ・クリエが、なぜ、ヴェネチア国際映画祭直前の暑い東京に滞在しており、そのかたわらに、どうしてこのわたくしがうろうろしていたのかを語り始めれば、話は一気に長くなるから、詳しくは触れずにおく。一部はすでに書いたことのあるエピソードを簡潔にくりかえすなら、ロブ・クリエが脚本を書き、それを市川崑が監督にあたるという仏合作映画の企画「涙なきフランス人」（これには、「苦勞せず」にフランス語に上達する方法）の意味もある）が大映で進行しており、夫人をともなつての彼の来日は、市川監督との打ち合わせと、シナリオ・ハンティングを目的とするものだった。この合作の企画は曖昧に頓挫してしまったのだが、わたくしは、当時の大映企画部に所属し、市川監督や増村保造監督のプロデュースにあたっておられた藤井浩明氏の依頼でその通訳をつとめることになったのである。

いま思えばいかにも贅沢なこの「フルバート」は、わたくしが大学院の修士課程に在籍していた東大の仏文科助手の清水徹氏の仲介で打診されたものだが、映画にも「ヌーヴォー・ロマン」にも目がなかったわたくしが、二つ返事で依頼に応じたことはいささかでもない。だが、そんな思い出話には何の意味もない。藤井氏は 55 歳として、わたくしは 35 歳として「若い花嫁——日記 1957-1962」に登場しているのだから、ことごとくが正確なものとはとても保証しかねるカトリーヌの詳細な記述にゆずる。

川上未映子 **戦争花嫁**

蓮實重彦 **タキシードの男**
批評の断念 / 断念としての批評

 第22回早稲田文学新人賞受賞作

間宮緑 **牢獄詩人**

中原昌也
誇りを持って **引き籠れ!**

田中りえ **ちくわのいいわけ**



ブレイク
篠山紀信
X
waseebun WB

朝鮮での私の分身 / 秘密の部屋 ほか一篇

アラン・ロブ = グリエ

平岡篤頼 / 芳川泰久訳

翻訳開始 農耕詩 "LES GEORGIQUES"

クロード・シモン 芳川泰久訳

「当座のところ殺さない力」に関する
いくつかの見解 水谷真人

「ロボット工学三原則」と日本国憲法 大杉重男

ぷふいの虚体 島田雅彦

快楽装置としての身体 福嶋亮太

切腹の快楽 伊藤比呂美 × 星野智幸
ほか

waseebun **1**

4月1日発売!!

ご注文は書店または直接下記編集室まで

早稲田文学編集室

03-3200-7960

wbinfo@bungaku.net

http://www.bungaku.net/waseebun/

発行：早稲田文学会

発売：太田出版

定価：本体 933 円（税別）

図書館ボランティア、はじめました。

日々是 夢 3

n a n a k i k a e

……はよいものの、早々に失敗をしてへこみました。ペコーン。朝、髪にリボンをきゅっと結んだときにもそのことを考えていた。

ぼんやりと学校に来て、先生のお部屋のポストにお薦め本を載せた和本をペコーン、と出してきた今も、坂を下りながらペコーンとしている。ペコーン……。

ボランティアのエプロンをかけていると、存外たくさんのひとに声をかけられておろろ。それでもなんとかして探していらした本を見つかることができたり、曇っていた顔がぱっと明るくなるのを見るのは嬉しい。

でも、最後の最後でひどい応対をしてしまった。ボランティア初日というのは言い訳にはならないし、古典くらい辞書引いて読めばいいのに、と思ってしまうたりもしたけど、求められたものをきちんとしたかたちで提供することができなかったことは、どうすることもできないくらいはつきりしている。地を這うようだった数学の成績を見ているように。

素直に省みることができないのは、私の弱さだ。

朝、己を戒めるように結んだりリボンだって、きつと形がくずれているにちがいない。

大学からゆるりと伸びた坂道は人気がない。春休みだもの、当然だ。ふつかりとボランティアの上に雪がかぶさって、珍妙な姿をしている。事務仕事とか、そういうことなら大概こなしてみせるのに、どうして人が相手になるとこわいのだろう。なんとなく答えは知っていたので、頭を振ってうつむいた。

ちっとも春の予感を匂わせない風はつめたたく、指先がつんと冷える。は、とはきかけた呼吸が白くけぶり、一瞬の後にすさぶ空風にさらわれていく。ぼんやりと吹きつける風のなかに立っていると、ふいに頭が軽くなった。ゴムで簡単に束ねていた髪が散り、世界に黒い線がはしる。吹き撓む枝がぱきりと啼いた。

うながされるように空を仰ぐと、どこかでみたような翅が頼りなくまたたいている。きゅっと結んだはずのリボンが風に流され散る葉になぶられ、ひらひらと飛んでいた。その姿のうるわしくないことといったら。

ただ一度、力を込めて結ばれただけの蝶々がふらふら、風に乗っている。結び目に込められた、私の苦い失敗を軸として。

ふりあおいだ空は煙って憂鬱そうなそぶりをしていたが、きらつとひかりがこぼれて台無しだ。日輪と目が合う。

そうしていつものように、まぶたに冬の風のような痛みがさした。

すぐ近く

illustrated by: eri

「連載」三ヵ所
福永信

ランドセルの中身がカシャカシャ鳴っている。耳障りだ。片足だけ使って通学路を帰宅している。このふんどとビニビンの芯が全部雑糞に折れる。通学路とはいえ車もくも通る。そして靴がカチカチ。ぼな。

さがしているのを見からない。そんな感じだ。しかしAの口からはあそんでいるんだと出た。友達もそう思ったようである。いっしょにやりたいが塾があるのて先を急がなければと告げて残金そうに振り返りながら自転車数台が走り去っていった。Aはホッとした表情になる。片足ついでに靴下で歩いてもいいじゃないかアスファルトなんだから指輪も当然あろうはずだがAの小さな顔には浮かんでいない。お母さんの顔だけが浮かんでいる。夏でもないのに汗をいっぱい浮かべている。靴下を汚さぬよう懸命にさがしているのだ。ガッソのあるやつだ。どうか一歩また一歩と近づいていることを祈るばかりだ。

近くにあるというといわれるが見つけられない。すでにBはあちをひっくりかえしこちをひっくりかえししてお部屋をななはものすべい状況だ。やっぱりお母さんがさがしてあげるからこちへ来そうだったのて来ちゃダメ向こうういてとBは廊下へ出て押し返す。自分で見つけるからと訴える。そして襖をビタリ閉める。椅子もひきずってきた。絶対に入れないように入部屋に入る。そこはでかいだろう。足の踏み場がないのである。それでもBは椅子をもうひとつひきずってきた。そんなことしないで足もとをよくさがせばいいのに。案の定というべきかひきずっているときに何かをふんづけて割ってしまった。見るにそれが母親の手鏡だった。見つかっただけでいかにこんなのになってしまった手鏡のなかでいくつもBの表情が重なっている。どこへ隠そうか早速思案している顔つきにも見える。この両親の寝室の向かいにはトイレがある。どうやらそこに目をつけたようだ。もちろんすぐに見つかってしまった。

言葉が大量発生してCの肩に飛びかかってくる。虫とり網を放り投げ退散だ。だが二手に分かれてはさみうちするつもりらしい。Cはコケてしまう。その右に顔がある。こちを見てにやりと笑っている。かんにんして、Cは涙をぼろぼろ落とす。汗もかく。三十七度九分だ。まづ汗と涙とも知れぬものになった粒をタオルでぬぐってくれるのはお母さんだ。そう思っで見上げてお母さんはどこにもなかった。やっぱり一人きりなんだ。一人きりでこの部屋にいらんだ。足音が扉の前でびたりと止まる。椅子をひきずっていききたいが身動きがとれない。カーテンがCの頬をな

でる。はらいのけでも顔にささってくる。ここまてとどかないはずなのにおかしくCは思う。また足音が聞こえてくる。扉の前でその音がまた消える。扉は押しても引いても開かない。扉の向こうにだれかが二人いるのだ。

Dが歩いている。まだまだかと周囲をヤキモキさせていたのだから歓迎すべきことではあるのだが素直によろこぶわけにはいかなかった。Dは靴をはいている。子供の靴だということにわかる。一度庭に出たということもわかる。雨で土がぬかるんでいるのだ。しかし汚れた汚れた靴はいつだってどこから持ってきたものなのか、片方はDよりお兄さんのものである。もう片方は少し小さいがやはりDよりお姉さんのものであると思われる。早く返してあげなければこんな雨の冷たいなかさぞかし困っていることだろう。Dはすっかり気に入ってしまった。お返しはしやがでである。ぬがせようとしてもうまくいかない。強引に取り上げようとするれば泣きだしてしまふ。飽きるまで歩かせしかなかった。したがってお母さんが協同購入から家に戻ってきたきょうようとしたのも無理からぬことであった。すぐにDの安否をたしかめたがもううぐすすり眠っている。足跡が小さいことからお母さんは大事件とは思わなかった。畳を雑巾でぬぐいながら二人の子供が我が家に侵入したところを思い浮かべてちょっと愉快な気持ちになったのだ。まだ娘の面影の残る若いお母さんなのだ。さすがに足跡が足だけということには首をかしげた。

『AIR』をやってみた

大杉重男

KEYの美少女ゲーム『AIR』は、名前はよく聞いていたが、キャラデザがあまり好みでなかったので敬遠していた。ところが最近私が愛読している畑健二郎の漫画『ハヤテのごとく!』（少年サンデー）連載の今流行の「萌え漫画」だが、タイムスケジュールに添ってフラグを管理するギャルゲーの方法を漫画に応用しているのが実験的で、今後どこまでこの方法が貫き通せるか注目される。作者が毎週「webサンデー」で出しているコメントと併せて読むと、漫画を知情的に考えて組み立てて行く手作り感が感じられて面白い）の中で『AIR』の主題歌である「鳥の詩」がBGMに使われるところがあり、それを実際に聞いてみたくなって今更ながら、去年急に『AIR』を買ってプレイした。目当ての「鳥の詩」は普通のアニソンと言えはそれまでだが、何度も聞くうちに癖になり、特にネットで拾った海賊版のピアノ編曲ヴァージョン（鷹石しのぶ編）と、韓国製のDVDに収められたリストばりの超絶技巧を展開するピアノ・ソナタヴァージョン（K・Kuroya編）は秀逸で、今でもカーステレオに入れて時々楽しんでいる。

『AIR』本編は、第一部「DREAM」、第二部「SUMMER」、第三部「AIR」の三部構成で、通常の意味でのゲーム部分は第一部だけであり、第二部と第三部は選択肢のないヴィジュアル・ノベルの様相を呈している。第一部は人形を「法術」によってただ歩かせるだけという売れない大道芸だけを頼りに放浪の旅を続ける少年「国崎往人」が、海辺の田舎町で謎の少女「神尾観鈴」と出会い、彼女の家に居候するところから始まる。しかし観鈴は往人と親しくなるにつれて空に閉じ込められた少女についての不思議な夢を見るようになり、衰弱して病床に臥す。往人は一度は彼女と別れて旅立とうとするが、思い直して彼女を「法術」で助けて消滅する。この観鈴ルートの外に分岐する二つのルートをクリアすると、第二部に入る。第二部は正暦五年（西暦九九四年）の畿内地方が舞台で、無頼の徒の「柳也」は、超絶的な力を持つが故に社に幽閉されている「翼人」の少女「神奈」の警護を命じられるが、神奈と侍女の「裏葉」を連れて社を脱走し、神奈の母を捜す旅に出る。そして高野山金剛峯寺で幽閉されている母を助け出すが、結界を破ったために朝廷の軍勢が高野山に攻め込み、混乱の中で母は矢に当たって死に、神奈は柳也を助けるためにおとりになって、高野山の僧たちの呪術のために空に閉じ込められ行方不明となる。柳也は神奈が死んで人間に転生した後も、呪いによって夭折する運命にあることを知り、裏葉との間に子供を作り、神奈を救う意志を後世に残すことにする。ここに観鈴が神奈の転生した姿であり、往人が柳也の子孫であることが示唆される。そして第三部では、カラスの視点から第一部の観鈴ルートをたどり直し、往人が消滅した後、観鈴が再び病に苦しみ出すが、母代りの叔母の晴子と共に最後まで前向きに生きる過程を描き、観鈴の死後晴子は自立し、カラスは飛べなかった空に舞い上がる。

海辺の物語なのに海は水平方向に遠く、空の垂直的な青さが目にまぶしいゲームである。私は特に第二部が面白かった。神奈・柳也・裏葉の主従関係は『ハヤテ』のナギ・ハヤテ・マリアの関係関係の思わせるものだが、年号と地名の明示は、匿名だったこの物語の時空に固有名を与え、

上野昂志の 餃子農薬 戯言人生

副校長業務連絡

あれは一九九五年のことだから、もう、十年以上も前になるか、北京大学の教授のお宅で、餃子を御馳走になったことがある。中国映画の取材に行っていたときのことだが、その教授は、通訳に同行してくれた渋谷裕子さん（翻訳家でもあるが、いまでは日本で行われる国際映画祭で活躍している）の北京大学での恩師である。

場所は、昔ながらの胡同の一角で、低い土塀も、小さな木戸も、清朝末期の風趣を漂わせるものの、一步入ると、昭和三〇年代頃の東京の下町にあったような軒の低い棟割り長屋ふうの粗末な建物があり、教授のお宅は、そのなかの二部屋に台所がついたような住まいだった（別に共同便所があった）。これが、かの北京大学教授の家かと思うと、知識分子が迫害された文革時代のことなどが脳裏を去来し、いささか暗澹とした思いにとらわれた。だが、李白の専門家である教授も、そのご家族もとても明るく、わたしたちが訪ねたときは、おばあちゃんから小学生のお嬢さんまで、一家総がかりで餃子を作っているところだった。

客をもてなすのは、まず餃子というのが、北京など北方の一般家庭の習いなのだ。実際、家の人たちが手ずから皮を捏ね、具を包み、大きな鉄鍋で茹で上げた餃子は美味しく、五〇個ぐらいは食べたのではない。酒は、むろんバイジュウ（白酒）という五〇度ぐらいの焼酎だ。教授と差しつ差しされつながら清談（政談にあらず）したが、教授に、日本人にしては（酒が）強い、と誉められたのに氣をよくして、いささか呑みすぎたかもしれない。帰りのタクシーのなかから見上げた空に、満月が皓々と輝いていたのを忘れない。

あの頃は、学校帰りの子どもたちが、立ち食いする屋台のような小店で売っている餃子などにしても、みんなその店で作ったものだった。だが、今度の農業入り餃子事件がらみで伝えられる情報によると、最近、そういう店の餃子も、工場生産・冷凍されたものを蒸すか茹でるかして売っているという。中国における食のあり方も、この十年ぐらいで決定的に変わったのだ。だが、それは、すでにわれわれが経験済みのことでもある。家庭で、家族一緒に食事をするという習慣が失われ、「個食」だの「孤食」といった言葉が云々され出したのは、九〇年代初め頃だったのではない（食卓から父親の姿が消えたのは、もっと前だが）。それが、食品の工業化とともに、いま、中国でも日常化しているのだ。

このような変化をもたらしたのは、大雑把に言えば文革以後の開放政策と、それに伴う中国の資本主義化ということになるが、汪暉の『思想空間としての現代中国』などによると、その内実は、もっと複雑である。まず、文革が終息したあとの一九七八年から、天安門事件が起こった一九八九年までに、二段階の変革があった。その第一段階は、一九七八年から一九八四年にかけての「農村改革」で、そこでの柱は、「人民公社」の解散と、国家の政策的調整による、農産品の価格引き上げや農民の多様な経営の奨励、郷鎮企業の発展などで、それによって、都市と農村の収入格差は縮小したという。

一九八四年から「都市改革」が始まるが、その基本は、国有企業の私企業への改編である。しか

虚構的なものであれ歴史との結びつきを与える。史実によると正暦五年（西暦九九四年）は落雷で金剛峯寺が焼亡し、高野山が一時的に衰亡した時期とされるが、ゲームはそれを「神を一つに束ねようとする」朝廷による「翼人信仰」という異端の抹殺事件として捉え直す。つまり『AIR』は日本の正統的な「神」朝廷によって抹殺された別の神の物語である。「鳥の詩」が「オタク」たちによって戯れに「国歌」と呼ばれているのも故なしとしない。

第一部と第三部の舞台も南国の海の風景とヒロインの母の関西弁（そしてクラスのイメージ）から、もしかすると紀伊半島の沿岸の町ではないかと思っていたが、ネットで調べると和歌山県美浜町がモデルになっているらしい。大阪の製作会社によって作られているのでこの選択は自然なのだろうが、「紀州」と言うとは何でも中上健次を連想してしまう私にはこの舞台設定はただごとには思えなかった。実際転生しては「翼人」の記憶の重みに耐えかねて夭折して行く美少女たちのイメージは、『千年の愉楽』の中本の一統の若者たちに通じるところがないだろうか。『千年の愉楽』にはオリュンポスという記憶装置があったが、『AIR』ではあらゆる記憶装置が焼き尽くされた後、それでも残る記憶についての記憶が孤独に空に漂い続ける。東浩紀は、このゲームについて「物語としては、父の不在あるいは無能力のうえで新しい『家族』の構築を試み、そして失敗する作品だと要約できる」と言うが（『ゲーム的リアリズムの誕生——動物化するポストモダン2』）、「父」は不在というよりは遍在して「新しい『家族』の構築」を失敗に導いている。この意味で『AIR』は極めて政治的なゲームと言えるかもしれない。

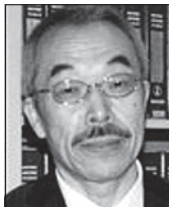


大杉重男 ● Osugi Shigeo
65年生。主要著書『小説家の起源——徳田秋声論』『アンチ漱石——固有な批判』。

し、工業資産の再分配のための査定は、農村の土地などと較べてはるかに複雑だから、結果的に大量の国家資産が、合法・非合法を問わず（という点で、まさに中国的だが）、地方政府や利益集団、その他少数の人間の手にわたったのだ。そして一九八五年以降、農村と都市の収入格差は再び拡大に転じ、一九八九年から一九九一年には、一九七八年以前の状況に戻ってしまった。

一九八九年の天安門事件のあと、政治的抑圧と経済的な停滞が続くが、それを転換させたのが、一九九二年の鄧小平の「南巡」であり、そこで行われた「先富論」である。それによって大量の開発区が出現し、先物取引市場、証券株式市場、不動産市場が開放されたが、「しかるべき民主的な監督メカニズム」がまったく構築されなかったため、極端な富裕階級が出現する一方、大量の貧困層や失業者を生み出し、制度的な腐敗を蔓延させることになった。そこにさらに、グローバル化による市場至上主義が追い打ちをかけたというのが、現在の中国社会である。

興味深いことに、農業入り餃子で問題の天洋食品が、河北省石家荘市に設立されたのは、鄧小平の「南巡」の翌年、一九九三年のことである。そして、日本の双日食料と取引を開始したのは、一九九六年の秋からだ。わたしは、メタミッドホスは、天洋食品の内部に関わりのある人間（複数）によって混入されたと推測しているが、それをもたらししたのは、一九九三年以降の中国社会の底にわたかまる、地球規模に広がった市場への怨念だったといえよう。中国政府は、中国での農業混入はないと全否定したが、それをいかにも中国らしい強弁とだけ見るのは間違いだ。むしろ、それは、国家としての支配が及ばない存在に怯える中央権力の、なんとかそれを糊塗しようとする方便でもあるのだ。



上野昂志 ● Ueno Kouichi
41年生。批評家。短く切れ味の鋭い批評で映画・写真・文学・社会を捉え続けていく。著書に『戦後60年』など。http://www.annodesu.co.jp/isogare/

集英社

あなたの
最期の人になる。

逝年

石田衣良

3月26日発売 ● 定価1,470円



この指が、肌が、唇が。一瞬を永遠に変えていく。オーナー・静香の逮捕によるボーイズクラブ解散から1年。リヨウは静香の娘・咲良やかつての仲間とクラブを再開。女性たちの欲望の世界にふたたび足を踏み入れる…。男と女の様々な愛のかたちと無限の変化数かずの謎。自らの身体を通して感じる、人の強さや弱さ、豊かさや心の影…。生と性の深奥を見つめた最新作。

（好評既刊）
媚年 しょうねん

●定価1,470円／集英社文庫 ●定価420円
媚夫となった太学生リヨウの、鮮烈な20歳の夏！

話題作『媚年』のその後。恋愛小説の名手が、清澄に謳いあげる性の深淵。



村上春樹の新訳でトルーマン・カポーティの『ティファニーで朝食を』が出たね。春樹といやあ、このところサリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』、フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』、チャンドラー『ロング・グッドバイ』と長らく読まれた名訳のある古典的作品を次から次へと新訳出版している。まさか書店の海外文学の棚をハルキ色に塗り変えちゃおうってえ魂胆じゃないよね!? 個人的には龍口直太郎の旧訳版『ティファニー』も捨て難いと思うけど、読者としちゃあ多様な翻訳の中からチョイスできたり、読み比べたりできる新訳ブームは、まあ歓迎すべきことでしょう。ほら、光文社の古典新訳文庫(ブツァーティ『神を見た犬』!)とか、池澤夏樹の個人編集による河出書房新社の世界文学全集(青山南訳、ケルアック『オン・ザ・ロード』!)とかさ。で、その河出版世界文学全集の刊行ラインナップを見ていて、おっ!? と思ったね。メアリー・マッカーシーの名前を見つけたのですよ。『アメリカの渡り鳥』の新訳が出るそう(旧版は古沢安二郎訳だったね)。メアリー・マッカーシーといやあ米国の人気女性作家だが、その小説はこのところ日本じゃほとんど翻訳出版されていない。近年だと、ハンナ・アレントとの書簡集が出たぐらいか? 映画化された『ジュリア』や『眠れない時代』『未完の女』の作家リリアン・ヘルマン(『血の収穫』のダシル・ハメットのパートナー)と晩年、大ゲンカしたことは有名で、二人の死後、メアリーとリリアンをモデルにしたお芝居までブロードウェイで公開されちゃったぐらいだ。

メアリー・マッカーシーの代表作は『グループ』。小笠原豊樹訳のこの本を読んだ時のことは忘れられない。「こんな面白い小説があったのか!」と声を上げたもんだ。名門ヴァッサー女子大(アメリカのお茶の水女子大)を1933年に卒業した8人の女の子のその後を描いている。そういや松任谷由実が大ブームの頃、四方田犬彦がメアリー・マッカーシーを引き合いに出してユージンを批判してたけど、ところがユージンにや、その名も『グループ』という歌があるのですよ!? 松任谷さん御本人と会った時、直接訊いたら「そういう名前の映画があったのよね」とおっしゃっていた。それこそ1966年にキャンディス・バーゲン主演で映画化された(シド

ニー・ルメット監督)メアリーの物語だったのだね。映画化作品を通して、ユージンにさえメアリー・マッカーシーは影響を及ぼしていたのですよ、四方田センセ!?

ところで有吉佐和子の処女長篇は、その名も『処女連禱』という。名門R女子大を卒業した7人の女の子グループのその後を描く……って、えっ? まんま『グループ』じゃん!? と驚いた。ところがへ、この作品、1957年発表で、マッカーシーの『グループ』は1963年刊行なのだ。つまりことは、メアリー・マッカーシーのほうが有吉佐和子の小説をパクったってワケ? まさか! 『グループ』の一部分はそれ以前に雑誌に発表され、もっとも早いもので1954年に「パルティザン・レビュー」に掲載されたという。林芙美子と有吉佐和子の評伝『女流』(関川夏央著)を読むと、有吉は東京女子大英文科を卒業後、1952年夏、大蔵省の外郭団体の雑誌編集者となり、日本駐在英米人を英語でインタビューしていたらしい。その語学力を思えば、彼女が「パルティザン・レビュー」に発表された『グループ』の一部分を原語で読んでいた可能性も否定できない。いや、なんとも興味は尽きないなへ。

件の雑誌に発表された第3章は「ベッサリーを貰っておいでよ」と女の子が彼氏に言われる場面から始まる。ベッサリーとは旧式の子避妊具だそうだが、ワタシャその実物を見たことがない。先日、飲み屋で紹介された若島正先生(『ロリータ』の新訳の人)にその話をしたら、フィリップ・ロス『さようならコロンバス』で若い恋人たちが親にベッサリーを見つけられ、破局を迎えるってエピソードの話になって大盛り上がりだったわけ。それにしても、ああ、気になるなあ……ベッサリー!?

ところでメアリー・マッカーシーと有吉佐和子、さて、どっちが強い? メアリーの元夫は『アクセルの城』の批評家エドモンド・ウィルソンだけど、有吉の元亭主は「北の家族」の創業者・神彰だ。神サマに訊くしか、ない? ㊤



中森明夫
NAKAMORI AKIO

遠くへ

「連載」三ヶ所
福永信

illustrated by eiri

Aがまたで一步一歩大地をふみしめている。みみずをぶんだが気づかない。これからのことであたまがいっぱいなのである。Aは絶対に振り向かないつもりだ。赤信号でもとまらなかつた。だから一瞬ひやとしたのだ。もうちょっとで命を落とすところだった。ひざをすりむいたけれどもはたかなかつた。ギョッと両手をにぎったまま。意志の表れなのだ。雨天決行なのだ。むろんその強い意志をさまたげる要因は多々あった。まず水たまりである。これがAの視界に次から次へと現われる。このゆるやかに打ち勝つのは大変だった。坂道や雨どいから勢いよく流れる水もあんなに怖くなかつた。回れ右して葉っぱを道でいくところだった。あぶないあぶない。断ち切るようにあらためてしつかり傘さして(ななめにしないで)小銭数えなおして(二つちの手には全財産にぎつていたのだ)歩き出した。どこまで遠くへいけるかたがためていたのだ。そんなAがたが日も落ちると急に不安になった。雨はやんだがあととちよとで泣き出すところだった。そんなときAは父の声を背後に聞く。まだ青年の面影を残す若い父だ。落とした傘が風でころがっていく。ここがいはん遠いところというわけだ。歩いて帰れたけれども。遠く空に流れ星ひとつ。残念ながらAは目をつぶって見えないかつた。

Bがどこまで遠くへけるか試している。すこゝ真剣な顔だ。大またで一步一歩大地をふみしめている。スカートの裏地にバツタがくついている。こち曲がったかと思うと今度は反対側に曲がる。あてすばうにはとういて思えなかつた。Bはしばらくまっすぐ歩くと傘をたたむ。電信柱の後ろに隠し両手で目をこすりながら交番に近づいていった。言葉をときおりつまらせながら自分は迷子であるに訴えた。そしておばあちゃんの家電話番号をつけた。なるほど自宅の電話であれば近所なのだから親はすぐわかるに。また自宅であれば一人で帰れるのである。しかしこれが県外のおばあちゃんの家だとうか。バトカードで送り届けてもらうことができるのではない。もうすつかり日も暮れたのだ。Bの算段はどうやらこういふ類のものに。たようである。たしかにBは靴を片方まだ明るいうちによその家の庭に投げたなど演出にしたか顔面もあつたしなかなかの女優だったのだからいそうなことに結果は自宅へ直行だった。おじいちゃんが車で駆けつけたのだから。すぐに着替へなさいと母親の怒鳴り声に追われすつぽだか二階へ向かった。まもなく母親の悲鳴が聞こえた。

Cは今日こそ遠くへいくんだと決めていた。できることなら外に出てみたいと思っていた。あんなふうに乗させて水たまりふんで歩きたいと願っていた。むろんそこまでは無理にしてもどこかで深呼吸吸ってみたい。だからCは話しかけられても答えずねむつたフリをしながら計画を一人こっそり練っていたのである。Cがいままでいちばん遠くへいったのはエレベーターの前だった。だれも廊下を通らなかつたしうまいくと思つたのだけれども扉が開いたところで院長先生とでくわした。それで回れ右して引き返したというわけである。その教訓があつたものだから次の計画は真夜中に実行すべしというのがCの考えであつた。しかしながらそれはなかなか困難だった。というのは気づくといつも朝になつていたのである。すうすうねむつてしまふのだ。さすがにいつかは目の出前に目をさますことがあるだろうと思つていた。羨望視していたという現実的にいつてそいう夜もあるくらいに思つていたのである。しかし残念ながらそいう夜は訪れなかつた。

Dはいま遠くにいるという。たしかに声のあいまいに波の激しく打ち寄せる音が聞こえてくる。海なのかと問うが答えはない。黙っているのではなくうなずいているのだという。ことは母親はわかつていた。いつもそうだからだ。けれどもDが一人でいけるはずもない。まだ娘の面影さへ残る母親がそこに犯罪のおいをかいたとしておちたこともおぼろげではない。近くに誰かいるのかと聞くDは答へなかつた。もちろん答へなかつたのではなくうなずいているのである。とにかく近くにあるお店に入るようにながした。黙っているのは近くにお店があるということだ。母親はちょっと安心したようである。一人でこわくないかと問うが返事はなかつた。大丈夫なのだということである。コンビニに入つたのだと母親にもわかつたのはいらしゃいませと聞こえたからだった。軽快なポップスが店内に流れているのもわかつた。お店の人にわかつてくれと母親は命じた。返事はやはりなかつた。しばらくしてガサゴソ聞こえておいてあれこれつながつておるじゃないかというのほどやう初老の男性のようである。声がかさい。事情を話してもまるで要領を得ない。それどころか小さいお子さんだといふのである。そんなはずはない。母親の声は大きくなった。周囲の教人が振り向いたほどである。携帯電話はレジの前に落ちていたものでそれを拾い上げたのだと相手はつづける。しばらく客は来なかつたからこれがいづつと落し物かわからなかつた。こんな近くで落ちていつかつたかしておつたと詫びた。母は決まっていた。母はそう思った。たがそのときDがすつと手をきつた。

fukunaga
2006

満ちる部屋

谷崎由依

薄い皮袋だ。どこまでが内部でどこからが外側なのか判らないほど、それは薄く、けれども破れることもなく、揺れ動く身体を包んでいる。

身体は揺れ動いている。まるで波のように、というには不規則で、むしろ視線を持ち上げて、海の上を、鈍色の空より僅かに明るい灰色をしたあの鷗たちの、絶えず中心をずらしていくような、定まらない、欺くような動きに似ているかもしれない。そのようにして、身体はそれぞれにはぐれてゆく。ひとつに見えた鷗たちの群れが、見る間にかたちを変え幾つにも分裂してゆくように、身体はばらばらと崩れてゆく。わたしはただそれを見ている。薄い皮袋の、この内部と呼ばれている側がわたしの身体らしい。わたしのものでありわたしであるという物体を、それが輪を描いて揺れるのを、わたしはただ眺めている。目覚めたばかりの人のように、わたしは身体のかなに入っているのではないのだ。真つ暗な向こう側、名指すことの出来ない、けれどもつねに想定されている向こう側から、目覚めたばかりの人は自分の身体のかなに、仕事をするための、人生を送るための部屋に入っていくようにして、入ろうとする。彼は扉を開け、敷居の上に立っている。けれどもまだ部屋へは入らない。それは異質なものに思われるから。そこへ踏み入っていくとしたら、砂時計のなかを歩くような気分になるだろう。部屋の中央では流砂が生まれている。その渦の中心は移動する。部屋の中心も移動してゆく。風とか水とか、流動する性質のものが場を支配している。天井を見上げると、それは眩暈がするくらい遠く、不穏な空を幾つもの雲が、海底を

通る生き物のように列を成して流れていく。流れていくものを、恐怖しているわけではない。ただ茫然と、彼は見ている。わたしは見ている、彼は、わたしは、風景から閉め出されている。頬杖をつく、他人の手のひらに他人の頬が載っている。手のひらと頬とは別々の方向へ逃げ去っていく。最後の砂が滑り落ち、すべての景色は消える。

部屋を出ると、今朝がた玄関の脇の辺りに停まっていた、差し渡し二十センチはあるかと思われる大きな蛾が、その四枚の羽根をばらばらに散らして壊れていた。大きいだけでなく派手で奇妙な模様を持っていた。明るい緑色の地に桃色の縁取りがあり、中央に黒い目が、それぞれ中心に白を持った黒い目がふたつ、嚇かすように、あるいは驚いて見せているかのように、睜られている。

そうしていれば、やり過ごせるような気がする、と彼は言う。待つて欲しい、とにかく待つて欲しいのだと。もう少し、まだしばらく、自分はこの世に生まれることができないのだから。彼はただ休みたいのだ。これまで何か頑張ったことがあるとしたら、それはすべて休息を得るためにしたこと、必死で走れば後でそれだけ休めるような気がしていたのだ。そんな気がして走った。走って走って走ったこともあった。気がつけばここへ来ていた。ここで、ここへ来てどこへも行けない。一日頭を抱えている。そうしていれば、今日一日こうしていればやり過ごせるような気がする。あと少し、あと少しだけこうして待つてもらったら。けれどもそれで休んだことになるのだろうか。次の日だったと同じことを思っただけなのに。わからない、休むということが何なのか、彼にはもはやわからない。

暗い食堂でぼつぼつと飯を食いながら、彼はだいたいそんなことを話していた。

わたしは黙って相槌を打つ。

わたしたちはしばしば、そんなふうに食事をした。わたしたちはつねにすることがなく、それでいてつねにすることがあった。大学というのはいくつかの場所で、それがわたしたちの入り込んでいる隘路の名前なのだった。平たく言えば就職難とか、そうしたもののせいだったかもしれない。研究職を望んで進学したのに、見通しなどまるで立ちそうにないというこの停滞。空気のそよともそよがない場所で、先のことなど考えられない――。彼の鬱々と語る物語をそうした理由で説明するのはたやすかったし、理にかなったことでもあっただろう。だけど会話はつねにその点を迂回

していくのだった。だってそれはそうではないか。そんなふうに断罪してしまうのは、脳を解剖してところを知ったつもりになるようなことではないか。

彼の名を、仮にIとしよう。

Iとは研究室も別で、同じ何かの集まりに属しているというわけでもなかった。学部での語学のクラスが同じで、この頃になって不意に再会した。互いに留年したものだから、ほかの知り合いとはなんとなく疎遠になっており、そうした者どうし、どこことなく気が合った。午後遅くなってから校舎のあたりをうろついていると出会ってしまった。生活時間が似ていたのだろう。二人とも星がなかったから。何も約束していなくても、出会ってしまった。何の約束も交わさなくても。

Iとわたしは性別が違ったけれど、つがうというようなことは思いも寄らなかった。無人島にふたり取り残されるような、それこそぞっとする話だ。先のない者どうしは手を取り合ってはならない。あるいは身体を喪失した者どうしは。それにわたしには恋人があった。恋人はとうに大学を離れて働いており、三ヵ月に一度も会えばよいという具合だった。将来について話し合うこともなく、漫然と遠距離で繋がっていた。恋人とは何かと訊かれたら、電話だと答えたと思う。

食堂の食事は味気なく、米は古くて汁物には化学調味料の味がしたが、そんなことにはもう慣れてしまっていた。集まってくるのはサークル活動を終えた学生や、明日の予習をする学生、授業の退屈をかこつ学生たちばかりで、二十歳をちょうどすぎた頃の彼らはいかにも生きているというふうだった。このほうの居心地悪さにはいつまでも慣れることができない。彼らとわたしと、ひどく離れているわけではない。似たような年齢の人間ばかり集まると、二つ三つの差が際立つものだ。それに大きく違っても、比較し優劣を競う余地のある細かな差異のほうがいっそう耐え難いのである。

わたしが黙っていると、Iは不意に何かを見出したように口調を変えて、海の気配がする、と言った。

部屋にずっと海の気配がして、ずっと部屋にいる。ただ窓だけがある、その窓を、開けると、隣りの家の壁がある。隣りは二階建てでこちらはアパートの三階だから、隣りの屋根の上に少しだけ空が見える。いつも見上げているだけの、その空が曇っている。灰色の、鷗に似た鳥が横切っていく。ただ空しか見えない、その空が、冬の海の曇り空なんだ。

Iの言うことはわたしにはよくわかるように思えた。この街には海がなかった。Iもわたしも他県の出で、それぞれに海のある地方だった。Iの話を聴きながら、わたしはよく知った海を思い浮かべた。広々と何もない平野を抜けて、電車を乗り換えたどり着く海。実家に帰ると、わたしはひとりでその海を見にいった。誰もいない海。風が吹いて海鳥が風に乗り、嘲るように飛んでいる。嘲るように、というわけは、その飛ぶ下が断崖だからだ。海鳥に目を奪われていては踏み外す。高く切り立った崖の下には海がとぐろを巻いていて、そこから落ちたら死体はけて上がつてこないと言われていた。

空だけではない、波の音もするんだ。幻聴ではないよ。

Iは笑った。痩せて乾いた実が裂けるような無様な笑顔。ぐっと削げた頬が、プラスチックの湯飲み茶碗からひとくち飲む。味も香もない薄いほうじ茶。目を逸らしそうになって堪える。そうだとわしたちの不幸はたぶん、中途半端にこの身体にしがみついていることなのだ。

わたしは黙ってその先を聴いた。

Iは続けた。アパートのすぐ隣りに川が流れている。川は川だが浅い川で、底がコンクリートになっている。その底に、幾つか段差が作ってあって、水が跨ぎ越すときに滝になり飛沫が上がるのだ。その音がする。ずっと聞こえる。水は、澄んでいるよ。

Iがその部屋で何を思い、何を見たのか、わたしは知らない。けれどもIが見たという空と、Iの聴いた水の音を、わたしは確かに知ることになる。わたしはIの部屋にいた。ただし、彼が消えてからである。

Iは消えた。Iはこの街を出て行った。大学と縁を切った。わたしは彼の住んでいた部屋を探し当て、空き部屋になったそこへ移った。

教務課へ行ってIの旧住所を聞き出し、空き部屋になっているのを確認すると、そのまま不動産屋へ行って手続きをした。簡単なことだった。むろんIには何も告げていない。そもそも彼の連絡先すら知らないのだ。わたしはわたしの欲望のことだけを考えていた。

Iの話はほんとうだった。アパートのすぐそばに、道も挟まず間近に川が流れていて、川の向こうにひとすじ私道のように細い道があり、道を挟んで山が迫っていた。山は夏には緑に、秋には

赤に燃えた。アパートは鉄筋のさっぱりとしたものだったが、虫だけはひたすらやってきた。部屋までは入ってこなくても、風の吹きぬける廊下にきつといる、大きく鮮やかな見たこともないような虫たち。脚の長いナナフシに、濃い緑色をしたバッタ、唸りを上げる毛だらけの熊蜂。色とりどりの鱗翅類。学校から歩いて数分でこんな場所に出るのである。

はじめは波とも聞こえなかった。水の細密なその音は、鼓膜をびつしりと覆う白濁のようで、聞き入れれば独特の快があった。

四角い建物のつめたい一角に帰り、狭い台所で調理をし、狭い風呂場で湯を浴びることに、朝となく昼となく満ちている水のざわめきにも馴れた頃、わたしの足が追いつくのを待っていたみたいにひといきに、寒くなった。暖房のあまり効かない部屋で毛布を被ってじっとしていると、冬が薄い爪先をとどころにさし入れる。

ひとりの友人も招かないでいる部屋に、あるときから不意に影がたつようになった。わたしの座っているつめたい床の上にそろそろとかたちを成し、見つめようとすると見えなくなる。次第に馴れて影らしくなったので、わたしはそれを影と呼ぶことにした。それが何かの寓意であり、寓意であるだけで充分ならば、影であるうがとかげであるうが同じことなのだと思う。象徴に意味を与えるのは与える側の勝手であるように思った。冬の匂いが強くなる。

影は部屋の中央に座し、わたしの様子をうかがっている。何かを唆されている気がして、アパートの廊下へ出た。

鉄筋の白い壁に、その背景には不釣り合いなほど大きな蛾が止まっていた。手を伸べても逃げず、触るとあっけなく落ちた。死んでいるのだ。大きな、驚いたような恐怖したような目が、羽根から凝っとこちらを見ている。背後でざざざと水音がする。わたしもその目を見返した。

むかし生家には曾祖母が生きていて、どうして生き物を殺してはいけないか知っていると問うた。父母も祖父母も働いていて、家には誰もいなかった。ただわたしだけが、老人の世話になり、老人のつれづれの相手をした。誰にも相手にされない老人と、誰にも相手にされない子ども。

わからない。とわたしは答えた。

すると老人は、皺の寄った小さな手で子どもの手を取り、生き物を殺してはいけないのは、生き物よりも幽霊のほうが怖いから

らだ、と言った。その手はひどくつめたくて、子どもは自分の体温を知った。灰色の、黒目の薄くなった老人の眼球が、それでもどこか唆すような笑いを含んでいたのを覚えている。

戒めを装っていたけど、たぶんそうではなかったと思う。からかいとか、さなければ脅かして遊んだのだ。なんとすれば、と大人になったわたしは思う。生きているものより幽霊が怖いなどというはずはないのだから。幽霊に何ができるのだろう。

だが子どもはそのことばを受け取った。まっすぐに、あるいは正反対に。頭が痛い嘘については保育所を休み、老人の匂いのする部屋で、子どもは虫の死骸を集めていた。あるいは虫を殺していた。幽霊がくるかと思つて。

うらがなしい微かな羽音が、裸電球の暗い明かりをさざめきながら覆っていて、やがて子ども手のなかに、羽根のあるものが落ちる。一匹、そしてまた一匹と。恩寵のように、子どもは思った。その羽根の震えたぶんだけ部屋が翳る。きつともうすぐやってくる。子どもは息をつめて待っていた。

幽霊さん、こんにちば――。

視線を落とすと鱗翅類の目が哀願するようにわたしを見ていた。

部屋に戻りちり紙を持ちだすと、広げて注意深く蛾を乗せた。鉄製の重い扉を風を起さないよう静かに開け、平衡を保ったまま靴を脱ぎ、部屋へ入り座卓にちり紙ごと蛾を置いた。

曾祖母が死んでから、もう十年が経とうとしていた。自分の孤独を押し付けてくるばかりの老人を、わたしはあまり好きではなかった。けれどもはや好悪の問題でもなかったのだらうと思う。ともかくわたしたちは一緒にいた。わたしはIのことを思った。Iは、生きているだらうか。

わたしは物入れから一枚の肩掛けを取り出した。光沢のある繊維を織り込んだ黒い毛糸を基調にして、明るい緑の大きな円をところどころに配してある。緑のなかには桃色、桃色の中央に黒が、そのまた中心に白い点が編みこんである大判の肩掛け。曾祖母が死んだとき、形見分けに貰ったのだ。老人は手芸をこゝととした。

部屋の隅で震えていた影が立ち上がり、きゅ、きゅ、と聞こえると聞こえないのあいだのような足踏みをして、よく伸びる腕を長く伸ばすと編み物を奪っていった。そうして口を開け、からからと笑った。笑ったように、思った。何しろ部屋には絶え間な

く水の音がして、影の笑い声といった蝶の笑うような微かな笑い声だったから。蝶が笑うかどうか知らないけれど、笑うとしたらきつとこんなふう、という仕方では影は笑った。

影は編み物をひらめかせ、抜き足差し足と足拍子を踏みながら、ゆうら、ゆうらと舞った。わたしはそのさまをじっと見ていた。座卓の上の蛾の目玉がころろなか飲ぶように見えた。蛾は生きていた頃、こんなふうに飛んだのかもしれない。

しばらくすると影は、わたしの視線に気づいたのか、ばつが悪そうに動きを止め、そのままずっと部屋の隅に戻り、つめた床に消えてしまった。あとには肩掛けだけが落ちていた。

次の日もまた次の日も、影は現れた。わたしは影の望むままに、虫の死骸を部屋へ持ち込んだ。わたしは影の望むままに、

橙色の蝶を拾えば橙の、薄桃色の蛾を拾うなら薄桃の、布地を影は身にまとった。生家の納戸や屋根裏で見たような、さまざまな色の混じった布たち。老人が若い頃好んで集めた、さまざまないまだ色あせない布たち。そんなものを持ち出してきては覚えはないのに。影は布たちを、どこからともなく出してきてはもてあそぶ。まるでわたしの記憶のなから引き出してでもくるように。

曾祖母の部屋には、細かな毛の生えた糸で編まれた布たちが広がっていて、障子のあいだから蛾が覗いていた。まだ編まれな、橙や緑や黄色の幾つもの毛糸玉は繭のようだ。みっしりと何

かの匂いが詰まったセーターを着せられて、わたしはいつも逃げたかった。子どもということのままならなさと結びついた、首に絡みつくその匂い。死んだものの、死にかけているものの哄笑のような匂い。編み機の持ち手を右へ左へ動かしている、まるまった小さな背中。編み機の動く、からからから、からからからという音にあわせて笑う声。

誰もいない白い部屋が、ふつふつと騒がしくなっていく。影は次第に濃くなっていった。確かな輪郭を持つというのではなくて、影は影のまま、ただ存在の気配ばかりが濃厚になっていくのだ。それから影は、長く埃を被ったわたしの化粧道具を掻きまわし、勝手に白粉や紅を使った。

影は女のなりをするのが気に入ったようだった。

——お前はほんとうにあの男なの。

わたしは訊いた。影は答えない。影は答えないものだ。あの男のなかにあった女性。影が踊ると、鋭角的な冬の匂いが、あちらこちらに匂いの裏側から溢れようとして身構える。

真っ青な蝶を拾って帰ると、とたんに満ちるものがあつた。はじけるような、波の騒ぐような匂い。しんと、寒さとともに満ちるもの。

したん、したん、と音がする。高い天井が空になる。その空を横切っていく冬の亡霊。大きく羽根を広げた表面に、幾つもの目玉がこちらを凝つと見つめてはまた去っていく、ゆっくりと、

天井近くを羽ばたきながら流れていく。まるで大きな感覚を失って、わたしは天井を眺めている。すると足許も流れ出す。砂時計の渦の中心に吸い込まれていくように、流れる、流れる、揺れている。この揺らぎ。I が海だといったのは、おそらくはこの揺らぎのことだ。

巨大な蝶の幽霊たちにつられたように、影も大きく伸びていった。海辺で焚く炎に照らされたもののように高く伸び上がり、そうしてわたしの手を取った。覚えのない影の手に触れると、わたしも輪郭を失くしていく。

わたしはふたつの影になった。

足許を砂が流れていく。砂時計の砂は、落ち込んでいく時間の先をたくみにずらし、揺らがせ、騒がせながら、いつまでも、まるで時間とは別のものを、時間であるのに時間でないような別の時間を流動させて、刻々と流れていく。そうしてわたしたちは踊った。足許で、波が、ゆうら、ゆうら、ゆうらと揺れた。いつまでも踊るのだ。

〈了〉

谷崎由依 ● Taniaki Yui
78年生。小説家。07年、「舞い落ちる村」で第104回文学界新人賞を受賞。外国文学を学んだ者の持つ、端正でありながら異物感を帯びた文体が特徴のひとつ。翻訳家でもあり、訳書キラン・デザイン『喪失の響き』が近日刊行予定。

読める! めくれる! 検索できる!
Web上で閲覧できる電子ブック

ばらっと

早稲田文学「WB」の バックナンバーは ばらっとで閲覧・検索!

早稲田文学「ばらっと」

検索

TRM 東京レコードマネジメント(株)
<http://www.tgn.or.jp/trm/>

photographers' gallery press 別冊
「写真0年 沖縄」

沖縄にとって写真とは何か。
写真にとって沖縄とはなにか。
そして写真とはなにか?

2007年秋、沖縄県那覇市で開催された
「写真0年 沖縄」展にあわせ、
「photographers' gallery press」より
別冊として刊行された「沖縄と写真・論」特集号

著者	伊藤俊治	平良次子	比嘉豊光
	仲里効	仲田晃子	浜昇
	岡本由希子	上間かな恵	北島敬三
	倉石信乃	山内健治	
	翁長直樹	港千尋	
	西谷修	鶴飼哲	
	屋嘉比収	豊島重之	
	田仲康博	西村康	

沖縄写真史年表付き
定価 1,890円(本体¥1,800+税)

次号予告
「photographers' gallery press no.7」
2008年4月発売!

購入先 <http://pg-web.net/shop/>
問い合わせ photographers' gallery
Tel 03-5368-2631 Fax 03-5368-2631
e-mail pp@office.email.ne.jp

動物⁴徘徊す

山本動物
Yamamoto Doubutsu

1973年東京都生まれ。85年頃ふとものごころがつく。
以来ずっと動物。それ以前のことはよくわかりません。

「遠くで犬の啼き声がした。」というのは日本近代文学を2.0化するにあたって、猫から犬への転換を成し遂げたと巷で話題の本年度読売文学賞受賞作の冒頭であるが、端的にこのみ見てもその後単行本にして五〇〇ページを超える物語が、遠くはなれてしまった動物の世界を取り戻し、自身がいかに動物になるかをめぐる展開されることは明らかだと思う。吾輩もともすれば所期の動機を忘れ、動物から遠ざかることしばしばなので、犬になりたいかはさておき、そのものずばりのタイトルを持つドキュメンタリー『動物、動物たち』（N・フィリパール）でも見てガソリンを入れようとくらんだ。が、しかし、「動物をめざす」というモチベーションを思い出すと同時に「徘徊」というモチベーションも思い出したせいか、気がつくとき吉祥寺で『ジャーマン+雨』（横浜聡子）を見ていたのだった。そして、これがまさに「動物、動物たち」というべき内容で、げに恐るべきは理性の狡知というべきか……。まず主人公林よし子を演じる、子どもでも大人でもなく、また男でも女でもなく見える、というよりもなんらかの獣をモチーフとした着ぐるみがなぜか実体化してしまったとしか言いようがない野寄好美のたたずまいが素晴らしいのだが、それはこの映画の魅力の一端に過ぎず、なにがよいと言って、よし子を初めとして、ここに出てくる人々がみな「動く」ことで状況を作り出し、切り開いていくことだ。幼少期の虐待、父の病氣、歌手になる夢とその挫折、淡い恋とその挫折、いじめetc. いずれをとってもすぐに深刻そうな、そしてここぞとばかりにまっとうなだけの説教を安いJ-POPを従えながら注ぎ込んでくる映画の二、三本すぐできそうな題材だが、よし子（＝横浜）は自身が近所のガキどもを集めて開く、精神分析のパロディめいたリコーダー教室でのすちゃだらな歌詞とメロディでもってそれらを圧縮し投げ捨て、ただちに次の行動に移っていくのだ。ここで精神分析（のバロディ）に使われる道具が笛

であることはなによりも重要だと思う。笛はその形状から一見探されるべき自分＝充実した主体のように見えるが、その実体は空洞であり、そこに意味が発生するのはその都度息が吹き込まれることによって、また、そのときに多数ある穴のどこを押さえるかで音が変わる楽器だからである。なにもない空虚の中をパッションとしての息が抜けていく、そして息たちはそのときどきの条件によって、違う場所を通り、違う音を出しながら、世界を埋め尽くしていくのである。ここに「－」、いずれ埋められることをあられもなく期待して待ち受ける、しみつた欠損の物語はない。ここに「0」、いかにもにぎにぎしく活劇が展開されるようでありながら、不可視の中心＝主体をめぐる思わせぶりなだけの物語はない。これはタイトルショットで示される十字路を示す標識のように、ただただ「+」の映画なのだ（ゆえにジャーマンも雨も任意の項にすぎない。重要なのは「+」だけである）。ラストにおいて、「人間、死ぬべきときが来たら死ぬんであって、それまでは死なない」というオヤジの自然（非）哲学に対し、よし子は「いまが死ぬべきときかどうか見てろ！」と自ら肥溜めに飛び込む。これは言うまでもなく、主体的な賭けではないし、その不可能性をめぐるロマン的アイロニーでもない。観念的な死も生も退けて、飛び、落下するという、因果をはなれ微分化された動きだけがそこで欲されるものなのだ。その落下を欲すること、否、それぞれが欲する動きを欲するままに状況の中で遂行すること、それが「+」が意味する唯一のことである。「よし子はよし子だ」という孤絶したトートロジーを「よし子は私だ」と錯聴すること。それが果たして近代文学2.0なのか単なる1.5世紀目の近代文学なのかかわからないが、ともあれ冒頭に挙げた日本文学2.0の犬の物語を「愛」の物語、とする錯覚だけは固く戒めたいと思う。㊟

生田武志 プアプア批評



Ikuta Takeshi

64年生。野宿者支援活動。著書『野宿者襲撃』論。連載タイトルは鈴木志郎康の「プアプア詩」に倣いました。ただし、ほくのは「poor」のことです。

ペットフード工業会の調査では、日本で飼われている犬は1252万2000匹、猫が1018万9000匹だという（2007年）。日本のペット産業の市場規模は約2兆3000万円に達する。10万円近くするエルメスやルイ・ヴィトンの首輪が「品切れ」になり、18金プレートに本物のダイヤをあしらった「ペットジュエリー」も販売されている。

これはペットを溺愛する「お金持ち」の趣味かもしれない。こんな話を聞いていると、それほどお金があるなら、その金を飢餓に苦しむ人へ寄付した方が「人道」的ではないか、とついつい思えてくる。

ところが、ほくの知っている野宿者の中には犬や猫を飼っている人がかなり多い。ほとんどの場合、捨てられた犬猫を拾ってきて育てているのだが、当然その食費が問題になる。日本の野宿者の平均月収は3～4万円。しかし、そのうち1万円以上かけて缶詰を買って猫や犬に食べさせている人がよくいる。つまり、全収入の3分の1ぐらいを使ってペットを食べさせているのだ。さらには、捨てられた犬を40匹飼っている人、猫を15匹飼っている野宿者もいる。こうなると、ほとんど犬や猫のために生活しているに近い。ペットへの「献身度」という意味では、どんな金持ちにも負けていない。

野宿者に限らず、例えば「正社員になると犬と過ごす時間が減るから」という理由で内定を辞退しフリーターになったという若者もいる。仕事の格差なんかよりも犬との時間の方がよっぽど大事なのだ。また、松浦理英子の『犬身』には、火事で取り残された愛犬を助けに戻って自分も焼死した少年のエピソードについて、主人公がその気持ちが痛いほどわかると思う場面がある。人間は、愛する動物のためには時間や金はもちろん、場合

によっては命の危険さえ厭わなくなるようだ。

いわば、人間は動物との関係で「人が変わる」というか、信じられないほど「愚か」にもなれば「崇高」にもなる。そのひとつの例は内田百閒の『ノラヤ』だろう。それまでろくに世話もせず構いもしなかった家の猫が行方不明になるや、内田百閒は身も世もなく泣き崩れ、1年以上もの間ほとんど泣いて暮らし続ける。そのうたえぶりと悲嘆ぶりは、感動的というよりほとんど「薄気味悪い」ものがある。

しかし、動物との関係での「愚かさ」と「崇高さ」の両極を描き出した作品としては、なんと言ってもフロベールの「純な心」（『三つの物語』）を挙げなければならない。主人公、フェリシテは、その愛の対象を次々と失い、最後にオウムのルルに心のよりどころを見いだす。三つの言葉しか喋らないルルと向かい合って話をし、行方不明になったルルを探し回ったあげく心労で病気になる（ここは内田百閒と似ている）。

ルルが死んで剥製になったあと、彼女はルルが聖霊の絵と「生き写し」だと気づく。彼女の心の中で、両者はひとつにむすびつく。そして、フェリシテは死の間際、なかば開かれた大空に1羽の巨大なオウムが頭上を舞うのを見る。「彼女は聖人のように死ぬ」（フロベールのメモ）。オウムという動物を通して、主人公は人間の経験し得る限界を越えてしまったかのようだ。「純な心」に限らず、フロベールはそのいくつかの小説（『聖ジュリアン伝』、『聖アントワヌの誘惑』、『ブヴァールとベキュシェ』……）において、驚異的な「動物文学」者だった。㊟



『三つの物語』
（福武書店）

FILE 03 1995 年

シーン4 震災時の城門市



・ナレーション

「神戸から高速で一時間たらず、兵庫県の城門市にも震災の被害は及んだ」（フレーム：俯瞰）
「多くの老朽化した日本家屋が倒壊。文化財指定されていた、伝統的な建築物の下敷きになって亡くなった方もおられることから、安全性を無視した国の過剰な文化財保護が批判されています」（フレーム：倒壊住居）

「城門市は住民の高齢化が進むなかで、各地の少年犯罪者の受け入れを実施している数少ない市です。少年Aといえは犯罪者の代名詞のように聞こえますが、復興しつつある町では、更正した匿名の少年Aたちのボランティアが復興の力となりました」（フレーム：少年達の笑顔）
「この町は数年前、少年犯罪が多発したため、地元の有識者を中心に青少年の教育に力を入れはじめました。更正の難しいう重度の少年犯罪者たちを町ぐるみで温かく迎えて更正に導いています」（フレーム：高齢者と若者）

・住民コメント

「震災が起きたとき、はじめに水が不足しとったんやけども、若い人がぎょうさん山にはいって水汲んできてくれてね」「夜はほとんど無法地帯になってたところもあったんやけど、ここいらはちゃんと警備されとったね」「若い衆が自警団作ってね。誰か言い出したんやろねあれ。いつの間にかおったよ」

・タウン誌編集長コメント

「(カット)」

・ナレーション

「震災や災害によって世の中が混乱していますが、私たちはそれによって人間の倫理が剥き出しになる瞬間を見てきました。過酷な状況の影で、人が本来もっている優しさと勇気が試されるのです。城門市の少年Aたちの行動は、世の中の混乱が決して暗い側面ばかりを露呈させるばかりではないということを教えてくれます」（フレーム：町俯瞰）

◎記者メモ 番組は制作会社によって撮影が終了し、放送日時まで決まっていたにもかかわらず、何物かの圧力によって放送中止。テープは局側が買い取ったが、年末の火災で焼失。この企画書は局の資料室から発見された。

シリーズ
少年Aの原譜

■企画趣旨
世紀末の様相を呈する日本で、今一体何が起きているのか？
1月の阪神・淡路大震災、3月の地下鉄サリン事件を中心として、未だ知られざる各地の特殊な事件や犯罪を調査。根底に流れる社会の暗部に迫る。

■構成

- 1 東京の俯瞰>ナレーション>オープニング 東京 (映像)>サリン事件から東京の猟奇犯罪等>コメント (週刊誌記者)
- 2 東北・北海道>東北各地の異常気象など>コメント (大学教授)
- 3 中部>神戸の復興場面>コメント (新聞記者)
- 4 周辺地震災害地>城門市>復興の様子>少年ボランティア>コメント (タウン誌編集者)
- 5 沖縄>海底遺跡>基地問題>コメント (地方議員)
- 6 東京>都心の主な宗教団体>コメント (ジャーナリスト)

■画面資料
シーン1

企画書
『NHK特集 世紀末列島 1995』
(放送時間 90分)

企画：制作者 株式会社レノックス
報道部・車谷リカ

Uminekozawa Meron
75年生まれ。様々な職業を経て作家に。諸事情により住所不定。各所を転々としながら作品を発表。著書に『左巻キ式ラストリゾート』（絶版）、『舞-HiME』『嫌オタク流』『零式』など。

Waseda Bungaku Free Paper

WB vol.12

WBは全国42都道府県+海外4都市で配布中!

2008年4月1日発行(年4回刊)

Published by 田島照久

Edited by 芳川泰久 (Editor in Chief)

木村安希子 青山南

島福沙都美 江中直紀

下田桃子 貝澤哉

武川葉月 十重田裕一

寺井ゆみ 三田誠広

近藤景亮 山本浩司

西條弓子

朴文順 市川真人

(Concept & Direction)

Design 奥定泰之 momoko

Photograph 篠山紀信 p24 中野義樹 p21

田口まき (Mami) p20

Special thanks to 青木誠也 山崎貴之

窪木竜也 中村太一

幸由美 渡部由紀子

山口元康 酒井潤

編集・発行 早稲田文学会／早稲田文学編集室

162-0042 東京都新宿区早稲田町 27-1F

TEL/FAX 03-3200-7960

Mail winfo@bungaku.net

印刷 凸版印刷株式会社

174-8558 東京都板橋区志村 1-11-1

TEL 03-3968-5188 FAX 03-3968-5409

http://www.toppa.co.jp/

▼春。なんかやかで春。前回校了から1日も休んだ記憶がないのに春。延期を重ねた「早稲田文学1」J、WB 今号と同時に登場です。数限りない人の力を借りて、渾身の1冊ができあがりました。内容、表紙は今号p4にて。980円は絶対お値打ち価格、売り切れぬうちにぜひ。▼本誌表紙のご縁からWB表紙も年2回、篠山センセイに撮って頂くことに。photographers' galleryの皆さんと、ダブルジャケットを飾ってくれます(ただし今号はA-R-G追悼のためpgの皆さんには急遽お休みをお願いし、中野義樹さんの鋭い写真をお借りしています)。▼これも春。「絶対兵役拒否宣言」の置き手紙が見つかりました。「旅に出ます、探さないで下さい」とのこと。先月は神保町方面に軒を借りるとの電話あり。どこに向かうかしれぬぶらり旅だそうですが、立ち寄った際にはみなさん、どうぞ泊めてやって下さい。全国巡って最終目的地は大手町とか。いずれまたWBにも顔を出す日もあるでしょう。(ic)▼日本語による文学・哲学・芸術表現の普及をめざす「WB」では、主旨に賛同・応援して下さる個人や企業の皆様からの広告出稿や配布場所提供等によるご助力を求めています(広告収入は部数と配布箇所拡大に用いられます)。関心をお持ちになった方は小誌編集室までご一報頂ければ幸いです。

街でも携帯でも
読める文学

× livedoor®

【アクセス方法】QRコードでアクセスするが「nv@ld.tv」宛に空メールを送ると、折り返しURLをメールで送ります。

ケータイ livedoor では、オリジナル小説を無料で掲載中！
WBコンテンツをケータイで！

!特典1
新人賞応募作に感想コメントを差し上げます。
※お一人様 年1作品

!特典2
「早稲田文学」半日公開講座にご招待
※08年度は冬予定

!特典3
「坪内逍遙大賞」授賞式観覧に、抽選でご招待。
※次回(09年度)開催

Wasebun
サポーター定期購読制度
できました♪

詳しくは「早稲田文学」本誌1号
またはWBサイトににて！
www.bungaku.net/wasebun/

尼僧ヨアンナ

イヴァシユキエヴィツチ著 関口時正訳

ひどい悪路を、しかも乗り心地のよくない幌馬車にゆられながら、スーリン神父は、管区長の命令でこれから訪れる修道院についてあれこれ思いめぐらしていた。ルーディンにあるウルシウラ会女子修道院は、一六一年、王妃コンスタンツィアの手で設立され、以来、神と人々の庇護のもとに順調に発展してきた。信仰の篤い王妃は、ポーランド共和国の東北、辺境の地におかれたこの修道院を、かつて親しく訪ねられたこともある。だがその時の旅があまりの悪条件のものですめられたため、結局王妃は健康を害し、長く患うこととなってしまった。もともと、どうやらそれは、スモレンスク地方の泥濘おびただしい荒野を旅するにはふさわしくない季節を選んだせいもあったらしい。かりにその巡礼が今回のような季節に行なわれていたならば、長旅といえども、はるかに楽だったに違いないのである。

九月の初めであった。ポヴォツクの町の僧院にあって数カ月をもつぱら瞑想と断食、苦行のうちに過ごしたスーリン神父は、この年の雨の多い短い夏がたちまち過ぎ去っていったのも知らずにいた。かわって穏やかで晴れ晴れとした九月が訪れても、彼はその推移にさえ気がつかなかった。僧院の独房にまでは、太陽も届かなかつたのである。しかし今、黒々と濃い森が次から次へとたちはだかるように現われる広野を走りながら、彼は九月の匂いを貧弱な胸に深くと吸い込んでいた。朽ちた葉の匂い、耕された土の春を思わせるような香氣、森から流れる重い湿った微風——そうしたもののまじりあつた匂いであつた。きのこが匂い、木々が匂った。泥土の上には、今時分が猖狂たけなわの野獣の臭いも漂っていた。

ごくごくたまに、林の中でタールや蜂蜜の採取にたずさわる者の小屋を見かけるのは、集落らしきものは一向に見当たらないので、誰が一体何を耕すのか、とスーリン神父は不思議に思った。しかも畑はどれもなかなか手入れがよく、ところどころには陽をあびた秋まき小麦の若芽が、来たるべき春の前ぶれを思わせて、

明るく、すがすがしく輝いている。緑の野を、スーリンは喜ばしい、格別の気分で眺めていた。もともと、上空では小鳥ならぬ醜い鳥が飛びまわり、ともすれば立ち止まろうとする馬を神父の使丁が叱りとばす声に答えるかのように気味の悪い声を発してはいたが、それでも神父は、この広々とした田園風景に、来たるべき慶事の図ともいふべきものを見る思いがした。それはとりもなおさず、これから取りかかる自分の仕事にとっての吉兆でもあつた。

スモレンスクとポヴォツク、それぞれの町へ通ずる街道が交差したところに、一軒の旅籠があつた。昼過ぎてまもなく、疲れはてた馬たちがそこへ走りつくと、スーリン神父は使丁を制して勢いよく馬車から飛び降りた。この旅と、それが単調な修道院生活の後にもたらした変化は、彼を一種特別な喜びで満たしていた。もともと自分の精神状態を好んで観察するスーリン神父だったが、その傾向は孤独な修道院生活でますます強くなつていった。彼は、自分の精神状態がかなり急激に変化すること、罪について思索するとき彼をとらえる暗いメランコリーの後には、必ずといってよいほど、何か喜ばしいことが待ち受けているような、愉快な気持ちと心の高揚が現われることにも大分前から気づいていた。そしてそれは、熱心にミサをとりおこなう時などに幾度となく天降るのを体験した、あの浄化の恩寵の特別な作用によるものだというのが彼自身の解釈だった。

そうした浮き浮きとした気持ちのたかまりのまま、彼は旅籠に足を踏み入れた。煙出しもなく、やたらと広い食堂にはほとんど人の気配がなかった。両手を腰にあてがい片隅に立つていた中年の女将はジブシーだという話で、スーリン神父も以前の旅で見知つた顔ではあつた。見るともう一人、小柄で痩せた貧乏郷土が、檯のテーブルの端の方で銅鍋の中のキャベツをむさぼり食っている。男の姿を目にして、スーリンは思わず身震いをした。愉快な気分は消え失せた。怖じ気づいたというのではない。この男が何者か、彼にはわかつていた。というより、生まれて初めて会った男であるにもかかわらず、何ともいふような嫌悪を即座に感じたのである。この男のせいで自分の身の上になにか必ずいやなことが起こる、そういう予感がした。

女将は神父の挨拶にいそいそと応じ、濁り酒をすすめた。スーリンはほほえみながらそのすすめを断つた。ハムスターか鯉を思わせる例の小柄な田舎士族は、顔を真っこんだ鍋ごしに神父を見やると、匙をねぶりながらにやりと笑った。笑うと、まばらで

原形もとどめぬ歯と紫色の歯茎がむき出しになった。

「いやあ、私はヴォウオトコヴィツチという者ですがね」男は言つた。「ヴィンツェンティ・ヴォウオトコヴィツチ、まさか、イエズス会の神父様たちは酒まで辞退なさると思つてもみなかった！」

スーリンは不安げに男を見やり、食卓のもう一方の端に席をしめた。そしてその煩わしい客には取り合わずに、女将に向かってキャベツのスープを少しくれるよう頼み、持っていた袋から薄く切つた修道院製のパンを取り出すと、さらにそれを小さな一口分に割つて口に運んだ。

ヴォウオトコヴィツチは匙をなめ終わると、それで鍋底をカチンとつき、丸い目でじつと神父のパンを見た。

「こりやまた何とも小さくお切りになるもんだ」男は感心して見せた。「どこぞのお嬢さんが上等なケーキでも切るようだ。それじゃあ口に入れてもパンだかわかりやしない……」

「われわれはいつもこうしてパンを切るのです。修道院のならわしです」スーリンはまじめな調子で応じて、その一切れをかじつた。

同時に彼は、男の相手になった自分自身が嫌になつた。

「何でまた？」男はパン切れから目をはなさずにしつこく聞いてきた。

「なぜか？」神父は相手の問いを繰り返してパンを噛みつぶけたが、もはやそれは何の味もしないように思われた。

「なぜか？ では何のためにそんな大きな塊にかぶりつく必要があるのか？ それこそ強欲、大食の罪というもの。われわれにはこういうパンでも充分です……」

「まあまあそう信心深いふりをなさるんでも……」ヴォウオトコヴィツチはぼそぼそとつぶやき、それから不意に左の目をつぶつてみせ、言つた。「いや神父さん、本当はえらい大食いに違いない。ま、旅の間はうまいまいも言っちゃいられないし、はばかりながら、私もこのキャベツだ」

女将が、テーブルの反対の端で空になったのと同じ鍋を神父の前に運んできて、横に木の匙を添えた。スーリンは何となく不快感を覚えながら器をのぞいた。中身は栗粥とキャベツであつた。よほどこつて炒めたとみえて、脂の滓が表面にひしめいている。「で、神父様これからどちらへ？」と、落ち着きのない小男がまた訊ねた。

スーリン神父は、食欲まで失せてしまうような嫌気が胸にこみ

上げるのを感じた。

「ルーディンです」神父は答えた。

「ほう！ルーディンへねえ！」ヴォウトコヴィッチは言葉尻を引きながら言った。「それはまずい」

「なぜです？」神父は驚いた。

「いや、それはまずい」相手は繰り返した。「もしや、ルーディンの尼さんたちのところへは？」

「その通りです」スーリン神父はしぶしぶ答えながらスプーンに目をもどし、鍋の中をかきまわした。

ヴォウトコヴィッチは急に真顔になった。

「神父さんはよく御存じでしょうが。よく御存じだが口にしないだけで、実際は何もかも耳にしておいでなんだ」

「よけいなお喋りはなさらん方がいい」熱いキャベツをのみ込みながら、神父は小声で言った。

と、神父がひどく驚いたことに、貧乏郷士の体が、まるで九柱殿の球のようにすつと長椅子の上を滑ってきたかと思うと、神父に寄り添うようにして座った。脇の下にもぐり込まれたように、食べるのもままならない。男は神父の袖を引っぱりながら言った。

「あそこで一体どんなことが起こっているか、神父様は御承知ですな。ああ、情けないことだ……」

神父はとうとう我慢しきれなくなった。

「そういう事柄についてあれこれとお喋りするのはいやめていただきたい。われわれ神学を学ぶ者ならいざ知らず、あなた方にわかることではないのだから。あなた方は、お祈りにつとめ、黙っておればそれでいい」

言うなり神父は立ち上がり、厳かに胸の上で十字を切った。ヴォウトコヴィッチはいささか狼狽して元の場所にもどると、しばらくは黙りこんでいた。神父は何事もなかったかのように腰かけなおし、また一匙一匙慎重に吹きさましながら、キャベツ入りの粟粥を食べはじめた。小柄な郷士は女将を呼んでビールを注文した。女将は、濃い泡のこぼれる緑色のダジャツをテーブルの上に置くと、そのまま微笑しながら男のかたわらに立った。女はスーリン神父の方へ好奇の目を投げかけ、その大きな黒い眼がうす暗がりの中できらりと光った。だが見られた方は気づかぬふりで、あいかわらず匙を動かしている。

(後略)

引用出典・『尼僧ヨアンナ』(岩波文庫)

「解説」 傾向と対策 藤野可織

要するに、傾向と対策なのだ、と思う。ひとの考えたには環境や個性などによる傾向というものがあって、その傾向に従って対策を練り、行動に移す。『尼僧ヨアンナ』の主人公、スーリン神父の「傾向」には、名前がついていた。キリスト教である。ただしそのキリスト教には、彼自身の臆病さと愚かさとかたくなさが寄生し、茎をすくすくと伸ばして花をつけてしまった。

ときは中世末期、ところはポーランドの片田舎。物語は、スーリン神父が派遣されてやって来るところから始まる。彼の使命は、年若い尼僧長ヨアンナにとり憑いた悪魔を祓うこと。度重なる失敗の末、悩み抜いた神父は、とうとう彼女を救うためにある凶行に及ぶ——けれど、神父がヒステリックなまでに被おうとしたその悪魔の正体は、平凡な自意識、平凡な反抗心、平凡な性欲、それからやや非凡なセルフプロデュースの能力でしかないことは明らかで、だから、結局、現代の日本で信仰も持たず暢気に育った私にしてみれば、悪魔だなんてまったくもって大袈裟だし、いっそ画期的だとさえ感じる。私は両手のなかのこの小さな文庫本をあたたかく、やや苦笑しながら眺め回す。私には彼の「傾向」の形がよく見える。私は神父を気の毒に思う、なにしろ彼は自分の悲心、あるいは性欲さえ正しく認識できずにいるのだ。花の茎をやわらかに曲げるみたいに、彼の「傾向」を曲げてあげたい。けれど、本を閉じたのち気にかかるのは、私自身の「傾向」だ。たまたま信仰がないものだから名前はないけれど、私にだって確実に「傾向」があり、私の練る「対策」はつねにその支配下にある。私はきつとぐるぐる歩き回っては頭をぶつけている。その形は誰のてのひらにも包むことのできる小さな文庫本に似て、やさしく哀れまれるべきものののだらうと思う。



ヤロスワフ・イワシキエヴィツチ
● Jarosław Iwaszkiewicz
一八九四—一九八〇。両親をポーランド人持ちつつ、生誕地ウクライナの文化や風土を基盤に小説や詩、評論など幅広く執筆。「月峰起」等の政治運動に加わったほか、様々な公職にも就き動乱期のポーランドを駆け抜けた。



藤野可織 ● Fujino Kaori
80年生。06年、デビュー作「いやしい鳥」が、破天荒な物語と平穏な日常を語りのレベルでも交錯させた秀作として文学界新人賞で強く推された、将来を期待される書き手のひとり。ブログ「近眼地獄」(http://chatare.ne.jp/myopia/)とその奇才ぶりを垣間見られるが、じつは極めて謙虚実直。

講談社◆話題の新刊

講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21

この歌がここで歌われたことは消えてしまわない。
独特のリズムで語られるみずみずしい日常の物語。

主題歌

柴崎友香

定価1,365円(税込)
ISBN978-4-06-214215-5



今、一番
注目されている
作家の新境地

同時収録 「六十の半分」
「ブルー、イエロー、オレンジ、オレンジ、レッド」

第137回 芥川賞候補作

俺の人生に時給くれ！

池田雄一

連載のカーニバル化するわたし

69年生。文芸批評家。著書に『カントの哲学』。共著として『ネオリベ化する公共圏』。



先生、「遊ぶ」って何したらいいんですか？

衝撃の質問。え、もう一度言ってくれないですか。いやていうか何でそんなこと訊くの。つかいま英語の時間じゃね。どうやって逃げをうとうかと思案中の教師を尻目に、くもりのない澄んだ目でまっすぐこちらをみつめ、じっと回答をまっている。しどろもどろで、切手あつめ（そりゃ趣味だろ）とか飲酒（あいて未成年だし）、あるいは「竹馬」や「ゴム跳び」といった間のぬけた回答をだして試みるが、当然のことながら相手の反応はよくない。だったらそんなこと訊くんじゃねえよ！ そう逆ギレしてみたくもなるが、相手はあいかわらず澄んだ瞳でこちらをみており、回答をまっている。じつはこのひと何もみていないんじゃないかと推測し、こんどは小林秀雄よろしくその目が恐ろしくなってくる。家庭教師をやっている者なら、そんな経験はいちどや二度ではないはずだ。

よく考えてみたら、無難に「友達とゲーム」などと応えられたかもしれないが、おそらくそれでも回答としては、まったくまちがっている。なぜなら、この質問は、解答があたえられてしまった瞬間に、解答でなくなってしまう類のものだからだ。かりにこちらが「ドミノ倒し」と答えて、この真面目な少年がドミノ（これといった本当は何に使うものなのでしょう）をどこから購入し、ギネスブック認定の世界記録めざし一心不乱にドミノをならべはじめたとしたら、もはやそれは遊びではなく「労働」なのではないか。しかも無償の。質問と回答というコミュニケーションによってなされる「概念化」と「べき化」によって、遊びの本質は明け方の霧のように消え去ってしまうだろう。

遊びにはこういった傾向がある一方で、もうひとつの困った傾向性をもっている。たとえば、数年前に非常勤講師をやっていたときに、よく学生から「非常勤の先生のやっている授業の方が面白い」というような発言をきくことがあった。これは、考えてみればすぐ分かる話で、ひと言でいえば、非常勤講師のような条件的にきびしい非物質的な労働においては、労働そのもの

が「カーニバル化」しているからだ、ということになる。かりに非常勤講師の給料が、やっている労働にみあうだけ増額され、永続的な契約関係も保証されたとしたらどうなるだろう。変な話だが、おそらくもらっている給料が**んの仕事**しかなくなるだろう。時間と金のむだなので、学生と飲むこともせず、仕事が終わったら、さっさと自宅に帰り、家族と食事し大いに語らうなど自分のための「遊び」の時間を確保するだろう。

給料分の仕事しかない。これはある意味とても倫理的な態度だといえる。給料以上の仕事をするとは、労働力という商品のダンピングなのだから。ところが、この態度を非常勤講師がとうとうすると、とんでもないことになる。おそらくコマ数は半分になるし、授業もまさに字義どおり「適当」におこなうことになるだろう。あげくに研究費の「自給自足」と称して、学生に対するカツアゲが横行することになるだろう。そうならないために非常勤講師は、みずからの「労働」を「遊び」に書き換え、仕事のモチベーションを維持することになる。そして本当に困ったことだが、労働は手が抜けるが、遊びは本気でやらないことには遊んだことにはならないのだ。

こうして非物質的な労働においては、1金銭的にも期間的にも厳しい労働条件、2そのことによる労働のカーニバル化、3カーニバル化した労働の賃金化、というサイクルによって、非常にコストパフォーマンスのいい搾取のシステムが成立することになる。具体的にいえば、中原昌也のような作家にもっと面白いものを書かせたければ、さらに苛酷な労働条件をあたえてやればよい、ということになる。じっさい、締め切りへの恐怖心をカーニバル化のトリガーとして使っている書き手も多いはずだ。こうしたカーニバル化の傾向は、労働のコミュニケーション化、およびフロー化がすすめば、さらに加速する（鈴木謙介『カーニバル化する社会』を参照されたし）。若年層（およびそれ以上の方々）がまわりの制止もふりきって「夢の実現」にこだわるのは、なにも贅沢病なのではなく、液状化した世界でおかしにならないための、なけなしのサバイバル戦術なのだ。㊟

文豪擬獣化宣言

けものみち計画の③大佛次郎「アザラシ」



画内澤旬子 ● Uchizawa Junko

67年生。世界各国を旅し、本作りの場から、図書館、屋敷、トイレまで取材。緻密な視線と果敢な切り口で、繊細なイラストと、批評性と好奇心の絶妙に混在した文章を著す。著書に『センセイの書』や『世界屠畜紀行』など。 <http://d.hatena.ne.jp/holohof76/>

文南陀楼綾 ● Nandaro Ayashige

67年生。書物をめぐる文筆。編集に携わるとともに、古本・マッチャルの収集家としても著名。不惑ブックストリートや「箱古本市」の提唱者でもある。著書に『ナンドロウアヤシゲな日々』『路上派遣書日記』など。 <http://d.hatena.ne.jp/kawasusu/>

大佛次郎の書斎は猫だらけだった。

神奈川県近代文学館に行った帰りに、同じ「港の見える丘公園」の中にある大佛次郎記念館に寄ったのは、次の用事まではかりと時間が空いた暇つぶしのつもりだった。『鞍馬天狗』の作者であることや、未知谷から『大佛次郎セレクション』が刊行中であることぐらいしか、この作家については知らなかった。

スペースは十分とは云えないが、大佛の仕事がコンパクトにまとめられたいい展示だった。大佛は猫好きで、「来世は猫だ」と云っていたらしい。八匹の猫が並んで餌を食べている様子を大佛が眺めている写真が残っている。館内に復元されている書斎にはもちろん生きた猫はいなかったが、大小の猫の置物があちこちに見えた。

見終わって館内の喫茶（霧笛）（この名は大佛の現代小説に由来する）に落ち着く頃には、この作家への興味がつのっていた。同館研究員の福島行一による評伝を読み、続いて随筆集や図録を集めた。気がつけば、小説をほとんど読んでないのに、にわか大佛次郎ファンが出来上がっていた。

擬獣絵師のウチサワに「大佛次郎ってナニに似てるかなあ？」と尋ねると、晩年の写真を見るなり、「アザラシかトドだね」と断言した。目がクリッとしていて、のそのした感じがあるからだ。帝大出の文学青年で、女優を妻に持ち、横浜のホテルニュークランドを仕事場にしていたモダンな人物をつかまえてアザラシって……。ただ、直木三十五は「大佛君は鳩のような目をしている」と云ったそうだから、目が印象的だったことは間違いないようだ。

大佛次郎に『鞍馬天狗』を書かせたのは、関東大震災だった。「鞍馬天狗と三十年」というエッセイによれば、長谷の大仏の裏手に住んでいた頃に震災に遭い、汽車が不通になったのを機に外務省の嘱託を辞めた。フランスの探偵小説の翻訳で生活を立てようとしたが、震災での雑誌はつづれ、編集長は畑違いの講談雑誌に移った。見よう見まねで書いたのが鞍馬天狗の第一作「準の源次」で、そのときに使った筆名が大佛次郎だったのである。成り行きで作家になっただけに、大佛は読者小説を書くことに複雑な思いを抱いていたようだ。

「どんなに仲がよい友人関係にも、不和は生じる。（略）私も我が友、鞍馬天狗があまり疲れることを知らず、絶望を知らず明るののに、反感を抱いた。幾度か、もう書くまいと思っただ」

大佛は生涯に六十一篇もの新聞小説を書いたという。幼少から勤勉で篤実な性格がそれを成し遂げたのだが、一方で、大衆小説に縛り付けられている自分を解き放ちたいとも思っていたのではない。記念館で見た鞍馬天狗の創作ノートには「例のごとく予定なし先づ動くこと」で始められた」と記されていた。鞍馬天狗に仮託しつつ、自らもアクションを求めているのだらう。

「連載」三ヶ所
福永信

ななめ

illustrated by eri

ジョキジョキまっぶたにつける。堂々としたハサミの使いこなしだ。あつというまに二つの三角形になってしまった。これが賞状でなければめてやりたいところだ。台所ではちょうど食パンが焼けたところ。Aはつまみをさらにひねる。そのまま二階にあがってしまう。これではお父さんがトイレから出てきたころには黒コゲになっているだろう。城の柱をひとつはずした。むろん城はすぐにくずれた。緊急事態発生だ。けれどもAは泣く弟をほうったまま外へ出る。出るとき玄関の靴をけちらした。お父さんはすぐに追いついた。手をつなごうとしたけれどもAはこぼむ。道をそれていく。植え込みのなかに入ってしまった。蟻の行列の前に苦労して石を置いた。せっかくまっぶさぐ進んでいたのだからかたがない。迂回するしかない。そんなふうに触角で感じ取ったようである。Aはその石を動かしていく。蟻の行列はご馳走から遠のいていく。かわいそうだ。パスはまっすぐ進む。Aの目には建物が次々と横に流れていく。窓に細い雨がなめなめにあたる。遠くに来たと思った。これからは一人で生きていくのだ。ぶると震えたのは覚悟の武者ぶるいだ。寒いからじゃない。しかし一歩外へ出たところであつた。声をかけられた。お父さんが追いついたのだ。帰り道。真上の空には流れ星。残念ながらお父さんしか見ていなかったけれども。

ひとことも好物だと告げたわけではなかったのにこのところ毎晩ちくわが出る。Bはそれだけですっかりご満悦だ。そのまま食べるのも好きだしマヨネーズなんかをつけてももちろん食べるしおでんのなかのちくわも大好きだ。穴のなかをのぞいてあそぶと毎回お母さんに怒られてごめんなさいをするけれどもそれでもほんとは心のなかではまたやろうと決意していた。その穴にキュウリやチーズなんかをつめてはおぼったりもした。指を入れてかじってケガしたこともある。食べ物のおかげで一等好物なのがちくわなのだった。Bにちくわさえ与えていれば泣くどころか素直にいうことを聞く。この情報は男たちの仕事を有利にすると思われた。しぼるのは何しろかわいそうだったし、かといつてうちよろされたらかなわない。近所に知れたら仕事の進行に問題が生じてくる。アジトにしては住宅地なのである。しかしこのちくわ情報には欠落があった。ほら門松みいだるうお嬢ちゃん正月に見るだろとおしやべりな男が話しかけてもBは黙ったままだ。どうした食べるいつもは遠慮などしないくせにともう一人が口もとにもっていつてようやく口にしたがすぐに吐き出した。ななめに切ったちくわがきらいだった

のである。穴がななめにひろがっているのがこわかったし先がとがっているのが痛そうだった。味だってまずい。わかるようなわからぬようなそんなことをいって泣き出すわわめくわ大変なさわざだ。いろんなものをひっくりかえして引火してアジト(だけ)が爆発したほどだ。

いい天気ねと声をかけると天気ばかりがよくてもしかたがないという。もうすぐ外であそべるようになるからというともう死ぬのかとこうである。Cがご機嫌ななめである証拠だが本人にそれをたしかめてはならない。まあ何もいわず平然と花瓶の水をかえたり傾いた絵の額をなおしたりしていればよろしい。母親の代役はまだまだ身に余る大役だからだ。Cもそれを十分知っている。だから花瓶にコーラを流しこんだり額縁の後ろにガマガエルの死体をおしこんだりするのである。むろんそんなことでへこたれるわけにはいかない。本でも読んであげましょうかと平然とかたわらに腰をおろしてみたい。一分もしないうちに寝息をたてるだろう。そのくせ布団をなおしてやるとわざとそれをぐちゃぐちゃにする。ねむったのをみはからって外へ出ようとすると逃げるのかと声をかけてくる。お母さんをお母さんでいてくれと追いつく。そういつときは黙って扉を閉めて涙をぬぐう。のびなくツツカツカとCの枕元に歩み寄ってバシッと頬をひっぱたくとい。二発くらいはよい。

雲ひとつない天気だった。本当は屋根のずつと向こうに小さく雲がひとつ残っているのだがDのいるところからは見えなかった。そのひとつだつてもうじきに見えなくなりそうだった(もつと遠くの別の屋根の向こうに隠れるだけだ)。小さな窓のカーテンがめくられてDがすやすやねむっているのが見える。風もさわやかで心地いいのだ。台所からはお母さんの鼻歌。新築ではないがしっかりと片付いた部屋が日差しに照らされている。部屋のかたすみに新しい小さなタンスがある。Dのものが入っているのだ。ねむっているDの片足がのびる。おへそのうえをななめに小さな影がよぎる。小鳥の影だ。音がしたわけでもないのにそのときDは目をさます。くすぐったかったにちがいない。その鳥はもう屋根のずつと向こう側だ。

戦後の大佛は、現代小説やノンフィクションと仕事の幅を広げながら、取材や講演などの名目で、国内や世界を旅している。遅れてきた青春を楽しんでいたようだ。ほくは、六十八歳の大佛が京都の鞍馬街道を歩く写真が好きだ。右手に資料かなにかを抱えてゆつくりと歩いている彼は、水を得た魚、いやアサリみたいに嬉しそうに見える。



旧作異聞 13



斎藤美奈子 ● Saito Minko
56年生、文芸評論家。94年『妊娠小説』で評論活動を始める。他の著書に『たまには時事ネタ』『それってどうなの主義』など。



『野菊の墓』(新潮文庫)

伊藤左千夫『野菊の墓』。いわずと知れた純愛小説の古典的名作である。初出は「ホトギス」一九〇六(明治三十九)年の一月号。夏目漱石『坊っちゃん』(これも初出は「ホトギス」)の同じ年の作品だ。ストーリーは単純といえば単純である。

語り手の「僕」こと斎藤政夫は小学校を卒業したばかりの一五歳、従姉の民子は一七歳。満年齢では政夫が二三歳、民子は一五歳である。

身体の弱い政夫の母を手伝うため、民子はしばしば斎藤家の手伝いに行っていた。きょうだいのように育った政夫と民子は「大の仲良し」だったが、周囲の目は厳しく、二人はある日、政夫の母に呼ばれて意見されるのである。

「男も女も十五六になればもはや児供ではない。お前等二人が余り仲が好過ぎるゝて人が彼を云うそうじゃ。気をつけなくてはいけない。民子が年かきの癖によくない。是からはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。吾子を許すではないが政は未だ児供だ。民や十七ではないか。つまりね噂をされるお前の体に疵がつく。政夫だって気をつけろ……。」
来月から千葉の中学へ行くんじゃないか。」

いづこも同じ親の心配。政夫はへんよくしろよといつても云ったじゃありませんか」と抗議するが、民子は赤くなつて黙っているし、へんの口がうるさいから、只これから少し気をつけてと云うのです」という母にも逆らえない。その日から、二人の仲はぎくしゃくしてしまふ。

それでも母のはからいで、二人は山の畑から綿を採ってくるようにと命じられるが、野菊を摘んだり道草をしたりで、帰りが遅くなってしまう。とうとう政夫は予定を早めて中学校に追いやられ、一方の民子はしばらくの後、抵抗むなしく嫁にやられる。そして流産したあげく、あとの肥立ちを悪化させて死んでしまうのだ。急を聞いた政夫が戻ってきたときには、時すでに遅し。結局、矢切の渡しで別れた日が今生の別れになってしまった。

無事なる二人、十代の純愛、若くして死んだ女性。

『野菊の墓』は二〇〇〇年代初頭のベストセラー、片山恭一『世界の中心で、

愛をさけぶ」を思わせるところがある。若くして恋人を亡くした男が過去を振り返って自らの悲恋を語る(そして自分は生き延びてちゃっかり結婚／婚約している)という構造は、ほとんどそっくり。

が、改めて読み返してみると、『セカチュー』との相関性が強いのは、むしろ堀辰雄『風立ちぬ』(一九三九)や、これはノンフィクション(往復書簡集)だけれども、河野実十太島みち子『愛と死をみつめて』(一九六三)であって、『野菊の墓』との物語上の共通点は、二人が十代であることと、女の方が若くして死ぬことくらいである。

『野菊の墓』はいわゆる「難病もの」ではない。民子の死に関しては「民子は身持になったが、六月でおりてしまった。跡の肥立ちが非常に悪く遂に六月十九日に息を引き取った」と、伝聞の形で短く書かれるのみ。そんなに急いで殺さなくても……というような唐突な死、である。

それでも『野菊の墓』はすべての純愛小説のルーツだといつていいだろう。この小説でいちばん奇妙というか印象的なのは、民子の死後の、母をはじめとする大人たちの態度である。二人の仲を裂いた母はへおいおいおい声を立てて泣いている。そしていうのだ。「政夫、堪忍してくれ……民子は死んでしまった……私が殺した様なものだ……」

民子の家族も同様で、弔問に訪れた政夫を迎えた祖母がいうには――。

「政夫さん、民子の事に就ては、私共一同誠に申訳がなく、あなたに合せる顔はないのです。あなたに色々御無念な処もありましようけれど、どうぞ政夫さん、過ぎ去った事と諦めて、御勘弁をお願いします。あなたにお詫びをするのが何より民子の供養になるのです」

民子の両親も含め、周囲の大人たちが政夫に謝罪する。不可解な事態である。政夫と民子は結婚も婚約もしていない(もちろん肉体関係もない)。好き合っていたのは確かだが、政夫はいわば民子の単なる幼なじみだ。そのくらいの関係のたかが中学生に、分別ある大人たちがなぜひれ伏す? ここで起こっている事態は意外と簡単。それすなわち、恋愛至上主義(あるいはロマンチック・ラブ・イデオロギー)の勝利、である。

恋愛小説はなんらかの障壁がなければ盛り上がりえない。政夫と民子の前に立ちちはだかる壁は二人の仲を引き裂こうとする大人たちだが、その理由は民子が政夫より年上だという一点のみだった。

放っておけば風化したかもしれない民子の死に「恋に殉じた死」という特別な意味を与えること。政夫と民子の仲は引き裂かれたが、結果的に二人は復讐に成功し、純愛は勝利した……。まことにめでたい限りだが、そのためには女の死が必要だった、というあたりがなんとも皮肉。

『野菊の墓』に民子の夫をはじめとする婚家の人々は一切顔を出さない。それもまた不可解な事態だが、ま、そっちが出てきたら純愛に水がさされるからね存在を無視された民子の夫こそ、いい面の皮というべきかもしれない。♫

知られざる探偵小説六二篇を
初集成する画期的全集!

山本周五郎

探偵小説全集 全6巻 完結

【第一巻】 少年探偵・春田龍介

【第二巻】 シャイロック・ホームズ異聞

【第三巻】 怪奇探偵小説

【第四巻】 海洋冒険譚

【第五巻】 スパイ小説

【第六巻】 軍事探偵小説

【別巻】 時代伝奇小説

末國善己編『天反響』

46判上製 各巻平均四〇〇頁
1冊2940円 別巻3360円

柄谷行人氏推薦!

イラン、

背反する

民の歴史

ハミッド・ダバシ HAMID DABASHI

田村美佐子・青柳伸子訳

*3000円

イラン随一の論客が、近代イラン二〇〇年の歴史を丹念に追ひ、西欧からの視線によって捏造された被植民国の歴史「近代性」と「伝統」の対立という幻を払拭する。政治・文化史の決定版。植民地近代性を問う直す画期的好著!

作品社 東京都千代田区飯田橋2-7-4/ 価税込
TEL03(3262)9753 FAX03(3262)9757

バスを待つ

バスに乗るといのは気持ちがいい。なにしろ眼の高さが違う。いつも歩いているときの目線からはるかに高い場所から、見慣れた商店街を眺め、颯爽と郊外へ出て行ったり、ふだんであればけっして行かないコースで町から町へと廻ってくれたりする。それに乗ってしまえばその安心感たるや、普通の自動車の比ではない。加えて安い。

初めての土地でバスに乗るのには、なかなか勇氣がいる。というのもバスはただちに、バスを乗りこなすことを要求してくるからだ。まず望みのバスの停留所を見つけるまでがひと仕事。いつ到着するかも、気が知れない。つい油断していると、降りるべき停車所を通り過ぎてしまう。おまけに番号の違うバスに乗ってしまうと、どこへ連れていかれるか、わかったものではない。わたしにとってある都市を観光するのではなく、そこに一定の期間にわたって住むというのは、バスの路線を知ることと等しい。まずバスである。

ソウルに初めて住んだときは、まだ今日のような地下鉄網はなかった。いきおいどこに行くのにも、バスを利用しないわけにはいかなかった。バスはいつも満員で、真っ黒な煙をお尻から出して運行していた。車掌さんがいつも甲高い声で、案内をしていた。18番、521番、588番……わたしは今でもあの時のバスの番号を憶えている。バスの窓から外の看板の文字を読む練習をしながら、ハングルを憶えたのだ。当時はまだ軍事事務から夜間通行禁止令が布かれていて、どんなことがあっても深夜12時を過ぎて外を歩いていることはできなかった。残り時間が乏しくなるなかで、大勢の人たちと暗いバス停のあたりに立つ。自分が乗るべきバスの車体に記された番号を必死になって探すと、そこへ突進して行く。いつまで経ってもお目当てのバスが来ないときの心細さには、格別のものがあつた。

ペオグラードでは路線を間違えて、まったく逆の方向に2時間もドライブしてしまい、台南では土砂降りの雨のなか、見当違いの場所でやはり2時間

待つはめになった。エルサレムでは、パレスチナ側へ抜けるため、バスを何台も乗りかえなければならなかった。検問所ではイスラエル兵が、まったく気分しだいでバスを止めたり、通行を許可しないふりをした。運転手の側もたいしたもの、行きもしない場所から戻ってきたと平然と出鱈目をいいながら、検問を通過するのだった。突然に乗客の全員が炎天下の道路に下ろされ、いつ来るともしれぬ次のバスを待たなければいけないということも、何回かあった。妊娠中の妻を連れた夫が、苛苛とした表情をしていた。

わたしはときどき思うのである。これまでの人生とは、言葉もろくに通じない町の外れにあるバス停で、いつ来るとも知れないバスを待ってきたようなものではないだろうか。小池昌代に「永遠にこないバス」という詩があるが、この気持ち、わかるなあ。バスがようやく遠くからやって来たときの、車体がせりあがってくるような感じ。それを見つめているときの、安堵感とも達成感ともつかない気持ち。

だんだん年をとってくると、永遠に来そうにないものを待つことが馬鹿馬鹿しくなってしまう。若いころはあれほど、不可能なものにばかり憧れていたというのに、もう待つという行為に飽きてしまって、なるべく近場で簡単なものでもすまそうという気持ちになってくる。忙しさゆえに人間が愚かになるとしたら、それはこういう状況を指しているのかもしれない。わたしは企業の管理職でもタレントでもないから、これからの人生において運転手を雇うことはないだろう。送迎の車が控えているということも、よほどのことでないかぎりあるまい。となれば、やはりバスと地下鉄だ。そういうわたしにもいつか、バスを待つことを止めるときが来るのだろうか。✎

53年生。宗教学・比較文学を学び、日本の大学教授であるとともに韓国・アメリカ・イタリア・パレスチナなど、世界中を放浪する文学者。『貴種と転生』は最も早い中上健次論のひとつであり、その後の中上論にも多大な影響を与えている。映画についても充実した著作を次々発表するほか、都市・美術・音楽・料理・民族差別・漫画と、幅広い活躍領域を持っている。著者に『月島物語』『映画史への招待』『モロッコ流論』など。

ビールの泡

③ 東京大学

大久秀憲

Ohisa Hidenori

シアトルから帰ってきたQに東大を案内してもらった。Qは大学院にもどって研究をつづけるという。相変わらず研究ばかりやっている。

このあいだは蛾を研究したという。どういう研究なのかは気分が悪くなりそうなのでできなかった。あの鱗粉を撒き散らすおおげさな羽ばたき、やわらかくぶちっと破れそうな腹。やめよう。

となりの研究室はウニをあつかったそうである。予定の実験が済んで、もうそのウニたちはいらぬ。それで処分したかという、できなかった。なぜならば、ウニはうまい。

といって食べることもできなかった。毎日つぶさに観察してきた我が子のような存在を食べてしまうだなんて、ひととしてゆるされるものではない。まったくだ。とはいえやはり、ウニはうまい。高い。

ウニは処分保留のままQの研究室にまわされた。みんなでおいしく剥きたてを食べたそうだ。

そんなはなしをしながら、構内を歩いた。赤門、安田講堂、三四郎池、と名所をまわった。

名所はじつはどうでもよろしい。僕にはかながえがあつた。

ひところ、毎日泳いでいた。区民プールで午前中二時間ほど泳ぎ、家にもどってごはんを食べて昼寝をし、夕方起きるなりプールにいった閉館時間までを過ごすという、強化合宿のような日々を送った。

いまではそんな熱も去り、ときどきからだをほぐしにいく程度だが、自転車プールへいく道の途中、東大にぶつかるのだ。

ぶつかって、それから大学の堀に沿うかたちになるのだが、道はそれしかないのに、大学の敷地は広いので、不当に遠まわりをさせられているような気がしてならない。こちらは早く泳ぎたいのだから、もどかしい。

農学部からはといって竜岡門へ出る。そのように構内を斜めに突っ切る。それがいちばんの近道だ。学内に通じたQの助けを借りて、いまそのルートを

固めようというわけだった。吉良郎に対する赤穂浪士の気分である。

ところが思うようにはいかなかった。斜めに突っ切れるのはあくまで地図の上でのことで、じっさいには起伏や段差があり、建物と建物のあいだの路は不規則に走っている。学外の道では学生はあちらにいくかこちらにいくかの二方向しかなかったが、学内では多方向に流れ、自転車の円滑な走行をさまたげた。

学外の道はたしかに混雑する。しかし道がなければさらに混雑する。道があるだけいいので、結局従来の遠回りが近道の総合一位であることが分かった。

それでQとほんやり別れて、僕はそれから「銀杏・メトロ」という学生食堂でビールを飲んだ。

メーカー希望小売価格336円の大瓶が、希望組合価格360円だった。これでやっていけるのだろうか。しかも麒麟とアサヒとをえらべる。赤羽と上野で380円というのを確認しているが、どちらも立ち飲みで、こちらは当然座れる。小上がりまである。つまみの方も、枝豆90円、冷奴70円、とか、ちょっと記憶がちがっているかもしれないが、ちがったところでびくともしないほど安い。

僕は小上がりにあぐらをかき、ビールを注いだ。コップがプラスチックなのが残念だったが、おおぶりなもので無罪とする。泡がおさまるのを静かに待ち、ゆっくり注ぎだし、泡とビールの比率をととのえ、正対し、ひといきに飲み干した。

しかしこのうしろめたさはなんだろう。ほかのどのテーブルにもビール瓶は見えない。まだ四時前だった。学生たちはみななんとか定食とかなんとかセットだ。これから授業のものも多いだろう。思い過ぎだといったのだが、彼らがこちらを見て見ぬふりをしているように感じられた。それでビールがまずくなるかということ、そんなわけではないのだった。✎



(宣言!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)

Mami <http://www.mamiweb.org>

私たちは、MAMIによるMAMIのためのMAMIであり、MAMIを想像し、破壊する。私たちはMAMIに突入した。MAMIが流出する。

NO.003_ 井内宏美 (画家)

1987/9/29 生まれ、香川県出身 AB型 顔色の木に腫掛けた姫は遠い日の記憶を嘔吐している最後のひと
とかからまで吐き出したら宇宙へ飛んでゆく無我の境地、我只此処に在り <http://www.hironi.net/>

事にとっとうと思ったの。

【川上】 その、ちょっとある距離感さ？

【坂本】 これはちゃんと弾けるひとも取り戻せないものだろうなって思ったの。言うなれば、うちなるアウトサイダーだね。「技術があると、それは表現になるのか」って話があるでしょう？楽器を滞りなく演奏すれば「表現」になるとも言えるし、現実にはそういう音楽ってたくさんある。ただ、その「表現と技術の間」に、必ず何かがある。それこそが音楽を音楽たらしめているものだと思うんだ。だから、ほとくの演奏にテクニックは必要なし。あるとすれば「グラインダーの扱いかた」かな。危ないし(笑)。

【川上】 「電気マッサージ器の持ち方」とか(笑)。

【坂本】 うん。それだけなんですよね。



【坂本】 ほかが目撃した音楽家としての「未映子」は、顔かたちと言うよりは、アーティストとしての上品さがある……。

【川上】 顔かたちは違うのか(笑)。アーティストの上品さってどういう感じ？ 逆に下品っていうのは？

【坂本】 未映子さんの歌詞とかも、ありがちな世界じゃないから、アーティストの資質としての上品さがないと成り立たないと思う。そういう意味では自由、ステージの未映子さん、けっこうバタバタしてるけどね(笑)、なんの問題もないと思うよ。落ち着きのないステージングで定評のある僕なんかに言われたくないでしょうけど。

【川上】 よっぽどバタバタしてるのかしら。でもね、最近わたし、15 分以上のライブを想像するだけでも怖いんですよ。いいライブとかおもしろい本って、読み始めたら、「これはどうせもう最高なんだろうよ」ってわかるところがあるでしょう？ そうすると、終わりを想定しちゃう。「もう終わってくれ」と思うわけ。終わったあとの余韻がわかるから、長い時間、感情の動きすぎることに耐えられない。たとえば早川(義夫)さんのライブとかでも、始まったらもう終わってほしい(笑)。早く終わって「よかった!」っていうのだけ体験したくなる。そういうのがあるから、それをあたしのライブの観客のひとも思ってるかもしれへんと思ったら、できなくて。一緒にやってる坂本さんもそう思ってるんじゃないかとか、みんなそう思ってるんじゃないかと思ったりもう……。

【坂本】 はやく終わりにくなくなっちゃうんだ。

【川上】 誰だって全員を同じ気持ちにさせることはできないし、全体主義的なのは表現者としては持ったらあかん態度であるんだけど、そう言われれば言われるほど、そうありたいと思ってしまひますんですよ。せったい無理なことがわかってるからこそ成り立つ、逆説的な思いではあるんだけど。100 人おったら 100 人、10 人おったら 10 人を、わたしが COTU COTU の音楽を聴いたときに思ったような気持ちにさせたい、ってのが絶対的にあるわけですよ。わかるひとだけにわかってほしいなんてことはせったい言いたくないんです。ライブのときは特に。

【坂本】 みんなをひとり残らず連れていきたいのはいっしょだね。僕もいちばん気持ちが高まっているのは、実ははじまる前だったり、最初の 10 分とかなんだ。でもお客さんはそうじゃなくて、みんなが場に落ち着いて集中力が高まって来るのにもうちょっと時間がかかる。この感覚のズレみたいなものがあるんだよね。そうするとコンサートに必要なのは、みんなの集中力が交わる着地点を見つけることだったりする。ほくもホントは演奏して 15 分くらいで帰りたい。昔はそもそもそれくらいで楽器が壊れて、始まって 15 分くらいで、もう音も出るものかなにもなくなってた(笑)。



【川上】 なんかね、ぐるぐる回るんやと思うの。レコーディングにも、ファーストマジックってあるじゃないですか。1 発目の音を出すときの、あの邂逅感。逆に、あらゆる場面で、なにかがスタートしてしまったら、すべてはそこに戻るまでの戦いやと思うんですよ。わたしの場合、たとえば歌をはじめて歌ったときの、あの感じに戻るまでの戦い。上手い下手とか表現力があるないとかじゃなくて、確実にになにかが、はじめの 1 発目にはあるんですよ。

【坂本】 でも、戻れないんですよ、あの頃には(笑)。元「たま」の滝本晃司さんの「犬が散歩する日」(滝本晃司のソロアルバム『100 の月』収録)っていうすごく好きな曲があって、彼がその曲を作ったのは、20 歳くらいなんだけど、「夜、街を歩いてて、犬が歩いているのを見た」って、それだけで、曲ができる。出会いのファーストマジックもあるね。

【川上】 作家でも、「デビュー作にはすべてが詰まっている」とか言うけど、あの感じですね。もう絶対に到達できないんだけど、それを追い求めることがなぜか人間はできてしまう……そこに、美しさと恐ろしさを同じ配分の量だけ感じます。そういうことを思うと、やっぱり長生きしたいと思うんですよ(笑)。初めての場所にちょっとでも近づきたい。戻りたいんじゃないかって、近づきたいんです。

【坂本】 そうだね。

【川上】 坂本さんのファーストマジックとか、いつも戻ろうとしているものってある？

【坂本】 ゼロ地点かな。ソロアルバム『零式』は「オリジナリティ」というものの正体は、手癖なんじゃないか」という考えから、まず即興演奏を録音して、自分の「身体の癖」「耳の癖」を採集する作業から始まったの。そしてそんな「癖」のひとつひとつを対象化し、作品化していった。このときもひとりの自分、うちなるアウトサイダー・アーティストが浮かび上がってきた。この発見こそがゼロ地点で、僕の音楽活動の出発点になったと思う。「零式」はそんな意味を込めて名づけたんだ。そして「癖」はなくすじゃなくて、どんどん新たな癖をつけることで、リセットしていくという方法論は、田中泯さんから学んだことなんだけど、今は、たとえば茶道の「武士が刀をはすす」みたいな、どんどんなすしていくという方法が自分に可能なかどうかなのかな、それを考えてる。オフクロが茶道の先生で、最近ちょっと興味もあってね。

【川上】 それは音楽とは関係のないところで？ お茶たてながら楽器するとかじゃなくて？(笑)

【坂本】 そういうこともたぶんやるんだけど(笑)。

【川上】 そういうことにもたぶんなるんだけど(笑)。

【坂本】 あと、徹底的に「型」なもの面白い。

【川上】 癖とか型の話で言うと、わたしね、俳句がぜんぜんできないんですよ。ある型を前にして、何ひとつ動かせないの、言葉を。どんだけチャレンジしても、俳句をいっつも完成させることができなくて。「ふつうのひとは、なんもないだっ広い原稿用紙に『はじめてください』って言われても自由なふるまいができないから、定型があるほうがまだできる」とか



言われるけど……行あけ詩が書けないとか改行ができないとかと一緒にねんな。中上健次さんが「改行できなかった」っていうのはまた違う、改行のできなさ。型とか枠の得体の知れなさ、恐ろしさと同じ合われへん……。これは一体何なのか、よく考えます。養老孟司さんがよく言うんだけど、ずっとフリーターとかで、「自分らしい仕事ができひん」とか「自分のやるべき仕事があるはず」とか思ってるのは、まったく勘違いだって。個性ってのはどの段階で出てくるかっていったら、お師匠さんについて 10 年なり 20 年なり型を真似する、そこでやっぱり真似できないところが出てくるって話。身体が違うから、同じようにはできない。そこではじめて「個性」と呼べるようなものが出てくるんであって、逆に言うと、定型を踏まるところからは個性なんて出てこないって考え方だよ。わたしも、究極的な意味で言うと、そうだと思う。

【坂本】 自分で個性を自覚するっていうのは、そこまで行かないとできないよね。誰かに発見してもらうことはできるだろうけれど。

【川上】 他者が見る個人の個性と、自覚できる個性って、まったく違うんですよ。「未映子さんの文章は個性的だ」とかってよく言ってくれるけど、わたしには、基本的に単なる文字と文字のコラージュとしか思えないし。本当の意味での個性って、自分でまだぜんぜんわからない。それに、個性がいいものだとも、どこかで思っていないです。そんな大したことじゃないとも思う。そもそも言語が、基本的に個性とは関係のない機能やからね。共有して初めて動き出す機能だから、言葉を扱っている以上本当の個性っていうものは出ないですよ、っていう気持ちがありますね。

【坂本】 未映子さんの文章、短いセンテンスの共感がすごい、共感の氾濫だね。ただそれが全体で押し寄せるとやっぱりその……(笑)。

【川上】 辛いな、みたいな(笑)。

【坂本】 粒子が集まって波になるみたいな感じ。それはもう「未映子」の脳内に直接繋がってしまうような強烈な体験だよ。

【川上】 そうですかね。でも、これからはまず定型ですね、「みんなと同じことを、まずやってみる」ってのが 2008 年ですね。何ひとつ満足にこなせないでしょうけど。わたし本当に好きなんですよ、鑄型とか見るのが。自分にいちばん足りてないところで。

【坂本】 最近興味があるのはのは、「量子論」。1000 万分の 1 ミリくらいの世界になると、「もの」のふるまいがまったく変わるって話で、そこまできくとテレポーテーションだってありうる非常識ワールドが出現するんだって。

【川上】 ある程度集まると「常識」になっちゃうんですよ。でもその「常識」を構成しているのは、「非常識な動き」だと。意識にしても、「物」が集まって構成しているところから「物」以外のものが生まれてる。なんて脳みそって「物」から、非・物質的なものが発生するのか……。

【坂本】 自然界って、真空中に粒子が生まれては消えたり、無ですら無でいられないっていう、不確定にもほどがあるよね。「物」もまたそんな非常識ワールド内包してるんだから油断ならないよ。

【川上】 そうですね。全体的な話になるけど、「やっぱりどこを切り取っても、そういうもので成り立ってねんな」って思う。何が何をしているのか何なんだ、みたいなことも、考えたら考えるだけわからなくなっていくし……うーん、本当に「曖昧な世界の、曖昧なわれわれ」ですねえ。

【坂本】 ぜんぜん音楽の話ができなかった(笑)。

坂本 弘道 ● Sakamoto Hiromichi

62 年生。アコースティックはもとより、エフェクター、グラインダー、電動ドリルなどを駆使する革命的チェロ奏者＝チェロリスト。麗しい音と美しい光が過激なアクションに載って展開されるライブは必見。CD『零式』(オフノート)。公式サイト「サイト・チャカモト」<http://home.catv.ne.jp/dd/piromiti/>

川上 未映子 ● Kawakami Mieko

76 年生。文筆歌手。「乳と卵」で第 138 回芥川賞を受賞、奇蹟の筆致で激しめを越えて激しすぎる絶賛を浴びる現代のゴッホ(女)。詩集『先端で、さすわさされるわ そらええわ』や、新作「戦争花嫁」ほか、自己模倣に陥らない作風の開拓を目指してなお貪欲に精進の日々。<http://www.mieko.jp/>

ニットやってる」って言うから、聞きに行ったんですね。それが、坂本さんもはいってる「COTU COTU」。

【坂本】 どうだった？

【川上】 すごい、ほんまにびっくりした。誰もがギョッとするようなトリッキーなことをしてるんだけど、メロディーがすごくきれいで。写真でも文学でもさ、そこははじめの衝撃っていうか、「ファーストマジック」みたいなものがありますよね。けど、2回目、3回目って見ていっても、坂本さんから出てくるのは、いわゆる上品さじゃないんだけど、ただただ美しい。あのビューティフルな感じって、なんやろうと思ってます、いつも。

【坂本】 ありがとうございます(笑)。

【川上】 ものすごい人間が悪いと思われへんわけです(笑)。そうじゃないと、ライブの一点集中であんな「美しさ」みたいなものを発揮する必要はないし、発揮できる道理がないでしょう。

【坂本】 それ、ほめられてるの？

【川上】 そう思うくらいに、「美しい、美しい坂本弘道」という単語として思うわけです。ほんまに、で、その美しさを、わたしはいろいろ帰り道とかに考えるんだけど……わからん。わからんものが、やっぱり最大に惹きつけられるでしょう。坂本さんのその「美しさ」って、その言葉があるからとりあえずそれに当てはめてるだけで、もっとようわからんもんやし、だからライブがあったらかならず目撃しときたいと思う。わたし、いつも坂本さんのこと考えるとき、坂本さんが死ぬときのこと考えるんです。で、それ思うたらもう、バーッと涙が出てくんの。

【坂本】 なんて？

【川上】 絵とか本は残るし、それだけでいいところがあります。でも、ミュージシャンのライブって残らない。音源もビデオも残るけど、そんなのしゃないやん。人間全般に言えることだけど、「いまのこの動きとか、叩いてる音とかって、死んだらどこ行くんやろ、どうなるんやろう」って思う。子どものような問いの気持ちで。坂本さんの音楽って、「有限の身体でやってる」ってことを、ものすごい意識させられる。

でも、そういう坂本さんが、いつかぜったい死ぬでしょう？ 「いつ死ぬんやろう」とか「死んだらどうしよう」とか思うんです。もう聴かれへん、見られへんって。アルバムの「零式」とかもあるけど、やっぱりライブやから、ああ、このひといつか死ぬんだ、っていつも思う。

【坂本】 いつかじゃなくてね、もう……(笑)。ギックリ腰やってからちょっと弱気なんだ。チェロ、何台ものエフェクターに機材、グラインダーまで持って歩くのはさすがにしんどくなってきたなあ。特に海外はね。

●

【川上】 坂本さんって、自分の音楽どう思っ、どういつもりでやってはるんですか？

【坂本】 音楽は記憶を引き出す力が強いと思うんだ。だから、出せる限りの音をはら撒いて、聴いてるひとひとのいろんな記憶を引き出した。一言で言うところ「イメージの氾濫」。

【川上】 それは、「表現において」ではなく、「ひとひとのイメージの氾濫」に、そもそも美的なものを感じてる？

【坂本】 自分も観客も美を発見できる状況に行くまで連れて行くのが勝負かな。ひとつとひとつの記憶が引き出されて、それが重なると、まったく違う旋律が現れたりする。そのとき、体験ではないノスタルジーが立ち上がった、そんな様々なイメージの氾濫によって、音楽の純度を上げることができると思うんだ。

【川上】 そういった体験があるの？

【坂本】 うん。ちょっと違うかもしれないけど、空耳で遊んだりしてる。たとえば、売り場のテレビの音と、店内のBGMとかが……。

【川上】 あ、うまくリンクするときありますよね。

【坂本】 そのときに、ビバッとこう……。

【川上】 ビバッと！(笑) TSUTAYA って、スピーカーが何個あって、コーナーによって違う音楽かけてるでしょ。そしたら、ものすごい気持ちいい音楽が流れてきたわけ。よく聴いたら、

ぜんぜん違う曲同士がふたつ、混ざり合ってた。めっちゃ探したんだけど、こっち行ったらその一部分しか聴こえへんくて、こっち行ったら違う一部分で……。そのふたつが完璧に共鳴しているポイントに偶然に立ったことがありました。坂本さんが音楽するときにはいつもあの体験なんですね。

【坂本】 音同士でもいいし、それが違うもの同士でもありうるのではないかな、とも思う。風景と音とか……聴覚と視覚は感覚としては上位にあるからいちばんわかりやすいけど、触覚や嗅覚でもいい。そういういろんな感覚を、同時に対比させる。

【川上】 坂本さんって、世界中のアーティストとコラボレーションけっこうしてらっしゃるでしょう？ それも、その一環ですよ。タップダンサーとやってみたり。料理しながらとかはまだない(笑) 【坂本】 そう言えば、年越イベントで「蕎麦 vs COTU COTU」っていうのをやったな。粉を挽く石臼の音や蕎麦の手打ちの音とのコラボレーション。あと、酷いのもあったよ。札幌のイベントでホットケーキをひたすら焼くパフォーマンスがいて、会場にホットケーキの塔がよきにょき立つの。ラストのセッションで共演のダンサーがそのホットケーキの塔に蜂蜜をかけたして、しまいいは僕もチェロもろとも頭から蜂蜜をかけられたんだ。しばらくは楽器がべたべたして気持ち悪かった。

【川上】 なんでもやりますねえ、もう(笑)。

【坂本】 昔の COTU COTU はね、いまでもちゃんと三木(黄太)さんとか佐藤くんが立派な曲を作ってやってるんだけど、最初の頃はもっと思いつきと言うか、混沌としてたんだ。ゲスト・ミュージシャンにたまたま超能力者がいたんだけど、みんなでソロを回すとき、彼の番はスプーン曲げ、それもバキーンと割るんですよ。「キャー」ってお客さんの悲鳴が聞こえたり、ありえないよね。

【川上】 小説もやっぱり、そのときそのときの坂本さんみたいに、うまい具合でのなんか奇跡的なものがあるんですよ。そうすると、坂本さんの場合、なにか具体的な「究極の、理想の音楽」があってそれをめざしてるんじゃないかって、一回ごとにそれがきらめくというような感じなんですか？

【坂本】 ライブはいろんな現場があるけど、あの手この手でニュートラルな地点にみんなで行きたいんだ。いろんなものを共存させてはじめて何かが起こると思う。

【川上】 だから、視覚的にもいろんな仕掛けがあったりとかね。ソロとコラボレーションって、どっちも好き？

【坂本】 うん。ただ、ソロはやはり「ソロ」というジャンルだと思うんだ。これを「音楽」というのは、ちょっと違うかなと思うときがある。

【川上】 音楽じゃないかも？

【坂本】 うん。コミュニケーションとしての音楽を考えたとき、醍醐味が味わえるのは3人くらいからだと思う。極論だけど。ただ、ソロであっても、絶えずいろんなコミュニケーションを創造することは必要だと思うし、僕にはチェロという愛憎相半ばする対象があるしね。

【川上】 契り合っているような演奏をするひとと、戦っている感じの演奏をするひとの二大派があるってよく言います。坂本さんって、ぜんぜん前者の「うっとり」がないんですよ。すごい恍惚となって演奏するひとと、それはそれですごい素敵ですけど、坂本さんは、厳しさが9割のような。「ぜったい気持ちいい顔せえへん」っていうのもありますし、なんか辛そうに見えるときもあって。

【坂本】 いや、いや、辛い、辛い。本当に辛い。楽器には、音を出すためのいくつかの段階があって、チェロの場合、構えて、ある位置に指を置いて、弓を引き、って段階がある。その各段階において、音を出す怖さ、逡巡がいまだにあって、簡単には絶対音を出せないんだよね。

【川上】 「音を出す怖さ」を詳しく聞きたい。

【坂本】 バイオリン族は、小さい頃から自分の身体の延長線になるくらい習得しないと、操るのはちょっと厳しい楽器。ほくの場合は遅くに始めた分、身体と思考の間に常にためらいがぎっしりある。もちろん、そこをなくすのが練習ではあるんだけど、ほくの場合、それを大

en-taxiから生まれた単行本!

超世代文芸クオリティマガジン

赤めだか

立川談春 著

4月14日
いよいよ
発売!

熱く深く感動と共感の沸き立つ傑作随筆

坪内祐三 著 ■定価1,680円(税込)

アメリカ
村上春樹と
江藤淳の帰還



生田紗代 著 ■定価1,470円(税込)

たといえば、世界が
無数にあるとして



重松清氏激賞「これはぼくたちみんなの物語だよ」

en-taxi

◆エンタクシー バックナンバー◆
書店でご注文いただけます。各号の内容等は、
本誌、または扶桑社ホームページでご確認ください。

ODAIBA MOOK No.21 SPRING 2008

エンタクシー 21号

A4変型判 定価980円(税込)

責任編集
福田和也
坪内祐三
リリー・フランキー

3/29 発売

「特集」ディランと歌謡曲のミッシングリンクを解く
田中長徳 福富太郎 前田司郎 湯浅学 他

「悪」とローライ

「吉田拓郎」

「私たちを惑わす
魔術の実相」
マジック
重松清 / みうらじゅん / 岡崎武志 他

「映画『ぐるりのこと。』
のことだけ……」
橋口亮輔 & リリー・フランキー

「平成談話スチャル」(落語の来し方行く末)
さだまさし & 立川談春

「新連載」カメラと歩く
東京大周游日誌 写真文 / 田中長徳

「短編小説」中原景 亀和田武 杉作 J 太郎

磯崎新 / 立川談志 / 横尾忠則 / 桂秀実

「天特集」未だ謎めく散人の語られなかつた秘部
永井荷風と



【川上】 今回のゲストは、歌手・未映子のアルバムやライブと一緒にチェロ弾いてくれてる、坂本弘道さんです。

【坂本】 いきなりですが未映子さん、ちゃんと寝てる？

【川上】 寝てますよ。っても、前は12時間くらい寝てたのがいま6時間くらいだから、ぜんぜん足りないです。

【坂本】 西原克成先生が長生きするには睡眠8時間以上とか言ってるよ。

【川上】 お医者さん？

【坂本】 うん。口腔とか顔の専門医なんだけど、『内臓が生み出す心』（NHKブックス）では移植手術を受けた患者さんがすっかり臓器提供者の性格に入れ替わっちゃうという話から入って系統発生学を説いているひと。

【川上】 それってどの臓器でもそうなの？

【坂本】 その本でも取り上げている『記憶する心臓』（角川書店）の心肺同時移植の話が代表的だね。先生には『歯はヒトの魂である』（青灯社）という著書もあって、この前『わたくし率 イン 歯一、または世界』読んでてちょっと思い出したんだ。あと、口で呼吸しろと。

【川上】 えっ！ それ逆やん、ふつつ鼻でしょ、鼻！ 鼻！

【坂本】 あ、そう逆だった（笑）。口呼吸で免疫力が低下するという説ね。これは人類の大きな失敗のひとつだそうす。

【川上】 口で呼吸すると歯並びも悪くなるし、万病の元やとはよく聞きます。子供の乱杭歯の治療でお母さんにきつく言うのが、「鼻呼吸にしてください」なんですよ。歯医者でそう言ってた。

【坂本】 ほくはフルタイムの音楽家をやる前は、自然療法の治療院で働いて、健康法も山ほど見てきたけど、極論ほどひとを惹き付けるよね。自然食品なんかも高いほうが断然売れる。

【川上】 そういえば前に坂本さんに、「もし、なにかの道のプロフェッショナルになれるって約束で生まれ変わるなら、何になりたい？」って聞いたら、「鑑識、鑑識」って言っていました。死体とかじゃなくて、たぶん交通事故のほうやと思うねんけど。

【坂本】 たぶん、前の晩あたり「密着！ 交通警察 24 時」とかの、ひき逃げ犯を追いつめるシーン見てたんでしょ（笑）。でも、前に原マスミさんが「社保庁も、赤福も、あれ全部僕だよ」って言ってたのには深く共感したなあ。世の中的には、僕は音楽で本当に良かったって思うよ。

●

【坂本】 それはそうと、あんまり寝られないのは、仕事がとんとん来てるから、だよ。音楽家としての仕事も？

【川上】 国歌斉唱のご依頼もありました。

【坂本】 あのね、国歌斉唱ってものすごく注目されるんですよ。「ユートゥーヴ」とか……。

【川上】 いま「ユートゥーヴ」って言いましたか。鬱陶しい！（笑）ほら、「Windows」を「ウインドゥス」とか、「WEB」のこと「ウェヴ」って言うとか、そんな手合いの……。

【坂本】 カメラのこと「キャメラ」みたいな？ すっとひとに会ってなかったの、うまく舌がまわらなかっただけです。それはいいから（笑）。YouTubeの日本における初期の大ヒットは「NHK

しょうこお姉さんのスプーの絵描き歌」、それに「サッカー日本対ドイツの国際親善マッチでの堀内孝雄の君が代」！ おそらく最初のキーがちがってて、苦しまぎれに旋律まで変えてしまったという（笑）。

【川上】 ちょっと半泣きになりながら歌ってるやつですね！ 出だしがアカベラやから自分でまず1音出すねんけど、最初が高すぎて……そんなん、いま考えただけでもソツとします。くわばらくわばらです。「やりのおし」って言われへんもんなあ。

【坂本】 うん、すぐアップされるから気をつけないといけませんよ（笑）。あとは？

【川上】 「ベスト出しましょう」とかも。CD3枚しかないのに……。

【坂本】 それって演歌歌手だよ（笑）。毎年「ベスト盤」出すの（爆笑）。

【川上】 タイトルちょっとずつ変えてね。あとは、だれだれに歌詞書いてくれませんか、とか。作曲の依頼は特になく。

【坂本】 わかってないなあ。僕はね、未映子さんの場合は、歌詞はもちろん、曲がすごく好きだった。

【川上】 過去の話ですか（笑）。

【坂本】 いや、曲を先に好きになった、と。

【川上】 わたしね、今年は坂本さんとアルバムを作りたいんですよ！ 今、音楽ですごくやりたいことです。

【坂本】 こうへっ、こうへい……光栄ですよ。

【川上】 囃んでますよ！ めっちゃいゝとこ囃んで！（笑）でも、レコードメーカーさんもいっぱい「やりましょう」みたいな感じで話くれんねんけど、だいたい「いま歌いましょう」って感じのタイトルのメールなんです。でもさ、1年後も彼らがそうやって言ってくれるのかっていったら、全然わかりません。うれしいしありがたいんですけど、なんか空回り感がある……芥川賞とかって、「獲ったひとが変わる」ってよく言うけど、このようにしてまわりが変わる場合もあります。

【坂本】 僕はかれこれ20年くらい空回っている気がするよ。まあ、どこへ行っても音楽が絶えず流され続けている国だけど、いざとなると真先にスポイルされるのも音楽というのも知ってる。昭和天皇崩御の時の、歌舞音曲自主規制っていうのもすごかったなあ。

【川上】 食いだおれ人形も、赤と白なのか黒と白の服に着替えてました。

【坂本】 あのと、チンドン屋はほとんど絶滅したと言われてるよね。

【川上】 それはなんで？

【坂本】 ほぼ一年仕事がなくなってしまったんだよね。その結果、ご高齢の方も多かったんで、どんどん廃業していった。一方では故・篠田昌巳さんとか日本のストリートミュージックとしての再発見の動きも始まるんだけど。

【川上】 ストリートミュージック（笑）。むっちゃ聞こえいいですよ……とまあ、そんな坂本弘道さんですが（笑）、坂本さんがチェロをはじめたのって、19歳くらいなんですよ。でもなぜ？

【坂本】 大学の新歓イベントで勧誘されて、それでなんとなく。まあ、新左翼のセクトにオルグされればしっかり機関紙購読して、自分も何もなかったんですね、19歳くらいの頃は。ただ、チェロという楽器のフォルムの美しさには心底はまってしまった。毎日下宿に持って帰っては眺めてたなあ。

【川上】 19歳からはじめてもできるようになるんですか。チェロですよ。それまでは？ 音符とかはぜんぜん読めない？

【坂本】 それまでは全然。

【川上】 ピアノでもできない？

【坂本】 全く。と言うかはっきり音楽は苦手だったんですよ。小学校中学校とずっと縦笛の落ちこぼれ。

【川上】 「穴を半分抑えて半音上げる」とか今もってむずかしいです。

【坂本】 当時はけっこう体罰とかあって……。

【川上】 あたしらんときもありました。

【坂本】 中学のとき縦笛を並べてその上に正座させられたのは強烈だったな。

【川上】 ちょっとした拷問ですね。

【坂本】 もう、トラウマ（笑）。

【川上】 臭いしね、笛って。唾溜まって。ほんで19歳までそんな感じて来たのに、そこからチェロを始めた。

【坂本】 苦手意識だけは大きく存在してて、ひょっとしたら克服すれば違う自分になれるみたいな、最初はそんな勘違いから始まったようなもの。成り行きとはいえ、音楽の道に進んでしまふなんて、当時の音楽の先生腰抜かすんじゃないかな。

【川上】 就職とかは考えなかった？

【坂本】 就職ねえ……実は大学卒業してすぐに一度あるんだ。3日で辞めちゃったけど。

【川上】 ！ 何を、何をしたんですか。

【坂本】 出版社。その後、学校の夜間警備、プールの監視、薬の人体実験のバイトもよくやったなあ。手に職をつけようと、専門学校に通い鍼灸師の資格まで取ったりしてね。

【川上】 で、そのあと桜井大造さんとか「風の旅団」に知り合ったんですね。

【坂本】 そう、演劇は好きでよく見に行ってたけど、 TENT 芝居は本当に衝撃だったなあ。「風の旅団」は90年代には大造さん達の「野戦の月」、池内文平さん達の「独火星」へと発展してって、大熊亘さんに誘われて僕が楽団とかで関わっていったのは「野戦の月」からだった。当時、鍼灸師の資格を生かすべく、身体関係のワークショップをいろいろ見て回ってたんだけど、最終的には瓜生良介さんの治療室で働くようになって。瓜生さんは演劇集団「発見の会」を創設した小演劇運動の先駆者で、大造さんの兄貴分のような存在だったんだ。治療家としても独自の健康論「快医学」を提唱して世界中を飛び回ってる人で、真のカリスマだよ。そんな縁もありつつ、2000年代に入ると大造さんが台北に移住して、さらに台湾を巻き込みながら「野戦乃月海筆子」（ヤセノツキハイビーツ）を展開してる。僕がここ数年台湾の芝居や映画の音楽に携わっているのも大元は桜井大造。

【川上】 こないだも大造さんは芝居の半分過ぎるまで土のなかに埋まってて、そのあとボコッて出てきて舞台上で軽トラが突っこんで、すごかったです。とっから音が聞こえると思ったら、ラジオセ持ってた出てきたりとか……。

●

【川上】 あたしと坂本さんの出会いは、バンドのレコーディングをしてくれた佐藤研二さんという、元「マルコシアス・パンプ」って1カ月から出てきた本当に1カ月のバンドのベシスさんが——左手に手袋つけてね、アグレッシブなベース弾きなんですよ——、「チェロのユ

WASEDA bungaku FreePaper

vol.012_2008_spring

わからん?! 文学

Wonderful BUNGAKU

坂本弘道＋川上未映子／大久秀憲／四方田犬彦／斎藤美奈子／内澤旬子＋南陀楼綾繁／池田雄一／藤野可織→イヴァシュキェヴィッチ／海猫沢めろん／生田武志／山本動物／谷崎由依／中森明夫／上野昂志／大杉重男／福永信＋eri／nanakikae／蓮實重彦

¥0